

川柳塔

昭和五十七年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六五八号



日川協加盟

No. 658

三月号

川柳塔改題200号記念川柳大会

日 時 昭和57年 4 月 4 日(日) 午前10時30分開場・12時開会

会 場 阪急グランドビル26F 会議室

大阪市北区角田町 8 - 47 TEL (06) 315 - 8368

(国鉄大阪駅、阪急梅田駅より歩2分。阪急百貨店東入口前)

挨拶
講演
兼 題

俳誌「青玄」主宰

「旗」
「節(ふし)」
「椅子」
「腹」
「積む」
「祝う」
「伸びる」
「樹」
「塔」

席 題 当日一題

各題2句・締切12時(欠席投句拝辞)

会 費 2,000円(記念品呈)

★昼食は用意致しませんので各自おすませ下さい。

☐開会の辞・菊田いさむ

☐閉会の辞・黒川 紫香

☐司会・西田柳宏子

200号記念誌上句集 作品募集

川柳塔 5月号に掲載。1人10句
出句料 2,000円。同人、誌友を
問わず、ふるってご参加を。

締切・3月20日厳守

所定の応募用紙を使用のこと。



己に春

立春とは名のみという寒さだが、どこかに春の息吹きが漂ってきた今日この頃である。

宗の詩人戴笠の詩の結句にこんながある。

「春は枝頭に在りて已に十分」というのである。春をたずねて、一日中かけ廻ったが、春はどこにも見当らず、むなしく帰って、ふと庭先の梅の枝をとって見ると、すでに蕾がふくらんでいたという大自然の厳肅な営みに驚いたという一句である。

オランダの哲人スピノザは之を神の摂理とよんだ。それで思いついて我が家の庭の池畔の紅梅を見に行ったら、すでに堅い蕾がしっ

会果てて本屋へ廻る連があり

正月のヘルスメーターにある怒り

かるい咳してから悪人の声となる

三十のときめき結婚詐欺に会い

港町で下りて勤続二十年

西尾 栞

かりついていた。己に春である。

路郎先生の

春の僕ただ良寛をこころざす

の一句を思い出した。

さて来る四月四日(日)は、川柳雑誌を川柳塔に改題して、丁度二〇〇号になるので、記念川柳大会を、僚誌の選者の御後援を得て、別掲のように開催する。会場は立地条件を勘案して、阪急グランドビル26階の見晴らしのよいところにした。ぜひお誘い合せて賑々しく御出席下さいますようお願い申し上げます次第である。

川柳塔三月号

座右の句

古くとも僕には仁義禮智信

(路郎)

私の句

流転する世に逆らわず花の彩

飛田好一

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

已に春

小を生かし大を生かす時代

川柳塔(同人吟)

自選集

■川柳太平記(46) 正岡子規と阪井久良枝

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(五丁)

秀句鑑賞

「同人吟」
水煙抄

水煙抄

句評リレー(奥谷弘朗・野田素身郎・板尾岳人・工藤甲吉)

■女性同人特集 わたしの宝物

高橋 操子・森田カズエ・神夏磯道子・梶 みどり・柴田英壬子・山口 美穂

小を生かし

大を生かす時代

橋高薫風

麻生路郎先生の没後、「川柳雑誌」を「川柳塔」と改題して発足したのは、昭和四十年十月号からであった。編集実務の不二田「三夫」さんが病に倒れ、谷垣史好さんと私が編集を引き継いだのが一昨年の九月、十月号からを送り出すことになったのである。以来一年間は中島生々庵主幹をはじめ副理事長の方々の病臥や事務所の移転等予期せぬ事が出来て、多難な年を凌いで来たわけで、私どもには十月号が一里塚のような気がしてならなかったであつた。

しかし、しばらく息をひそめていた句集の出版事業も、旧臘十二月一日の堀江正朗・芳子ご夫妻の「二人三脚」が出たのに続き、この三月には同人の塩満蔵さんの「夫婦酒」、白岩文衛さんの「出会い」が相次いで上梓されることとなった。共に句文集で、お二人の個性さながらの書であることとて今から大いに楽しみにしている。

「二人三脚」は単に川柳人仲間だけでなく広く関心と呼び、朝日新聞、毎日新聞の島根

西出 楓楽・内芝登志代・政岡日枝子・有田とし江・安藤寿美子(61)

愛染帖……………橘高薫風選……………(52)

「後進にのぞむ」を読んで……………直原七面山……………(55)

天気「正朗」なり祝賀句会……………橘高薫風……………(56)

「手腕」……………梅谿庵不醉選……………(58)

一路集「石仏」……………清野こう選……………(58)

「父」……………横地雅風選……………(59)

初歩教室……………本田恵二朗……………(60)

柳界展望……………那須鎮彦……………(62)

82年新春おめでとう会……………(64)

本社二月句会……………(67)

各地柳壇へ佳句地10選・河野君子選……………(71)

編集後記……………薰風・酔々・鬼遊・史好……………(81)

座右の句

鳥の学者は禽の眼をもつ

(清生)

私の句

なんとでもぬかせとダンブつつ走り

岡田拳法

版をはじめ、島根日報や点字毎日からも取材

があつて、ご夫婦の川柳に取組む以前の真執

な生活が脚光を浴びたのであつた。また、九

月には、故清水白柳さんの十三回忌に因む句

碑が建立されることになり、川柳塔の「温故

知新」の精神が発揚されることとなる。

このような趨勢の中で、四月四日に川柳塔

改題二百号の記念大会を迎えることは誠に仕

合せなことで、生々庵主幹も去る一月十五日

のおめでとく会に大成閣まで出向かれ、四月

への自信を深められたこととあわせ、ムード

は盛り上っているのである。

六巨頭と言われた指導者活躍の時代には、

各柳社の単位で川柳の社会化に努めたのだが

昨今は川柳界を大きくまとめた運動が希求

され、小を生かし大を生かす川柳界でなけれ

ばならないと思われる。

今や日本川柳協会も組織が充実の一途を辿

り、活発な事業と幅のある社会化運動を進め

る気運にある。日川協を生かすには、それぞ

れの柳社が堅固でなければならぬ。川柳塔

社を生かすには所属する各地のグループが堅

固でなければならぬ。それは修身齊家、治

国平天下の理であり、

路郎

の精神である。

話はいささか堅苦しくなつてしまつたが、

川柳塔改題二百号記念大会の意義をご理解願

つて、我田引水ながら、川柳塔社内外を問わず

絶大なご支援をお願い申し上げる次第です。



西尾 栞選

米子市 小西雄々

厄年を無事にすごした出勤簿
熟年へまだ助走路をかけ回り
後厄の自重へ欲得ない歩幅
不景気へ犬の美容院は混み
しみじみと三面鏡に教えられ
反省へ明日の天気を信じよう

鳥取市 河村日満

堀江夫妻の句集「二人三脚」を祝う

夫婦でも句はライバルという気概
スイスイときた訳でなし夫婦仲
責任を知る音で発つラッセル車
王の座の面影はなし試歩送る
影だけがよろめく筈がない自覚
作文にトイレのながいのを書かれ

京都市 山本規不風

童謡を唄う綺麗ながみから
拾われてしあわせ篤い桜貝
知恵のない妻でとっても可愛ゆくて
騙されるような煙草の輪の中に
安心をもらう受話器をそっと置く
手の届く距離を保っているリング

奈良県 村上春巳

駐在所留守で野良犬日向ぼこ
野良犬のくしゃみお前も風邪なのか
公文書御清栄とは面映ゆい
銀行の金庫は底に穴がある
六郎の絵からもうた温かさ
微生物の餅がなやみの老夫婦

兵庫県 遠山可住

宝くじ当った顔で笑ろてみる
笑い袋の笑いをもろて店を出る

もの言うのもいやなのにネエあんなネエあんな
妃殿下と同じ名前で酌ぎに来る
まっくらな冬が待つてゐる独り部屋

竹原市 山内 静水

狙い撃は覚悟ふらねばならぬ旗
どうでもよいことをしじみ想う夜
初志捨てぬ敵ながら敵ながら
無雑作な輪ゴムの髪に匂うひと
念のため辞書ひいてみる日本語

青森市 工藤 甲吉

一瞬の風一瞬の女の美
千畳敷も万畳敷も海は母
世の中は一人笑えば一人泣き
止り木も坐り馴れると雅味があり
カンカンガクガクいつか定量など忘れ

東大阪市 市場 没食子

来る人が来て去に元日黄昏れる
勲章に弱く明治は育てられ
福德円満女難の相は消えやらす
笑ろてすむ落し物した初詣
もやし子の見本のように孫育つ

和歌山市 野村 太茂津
てにをはも無くて生きてた年賀状

雑煮満腹今年始める意け癖
戌年の妻に今年も吠えさせる
出雲路のプランへ何故か数珠を持つ
血統書犬も偽モノかも知れぬ

桜井市 岩本 雀踊子

憎み切れぬ男のくれた夢がある
朝の靴みがく夫婦という絆
父の背を越えねば不孝者になる
子に賭ける父が働き蜂になる
十指皆武器とする夜の蝶になる

大阪市 小出 智子

三月を待ち焦れてるえのぐ箱
春の靴遠いところへ行きたがる
女の齡に触れたりしない赤電話
うかうかとまたも柳の芽に越され
鳩尾を少し押えて「ハイ」という

宇部市 平田 実男

父十二月十九日に没す(四句)
納棺へちよつびり抵抗する重さ
お別れへ男鳴咽のない涙
ハンドルがまだ病院の方へ向く
孝行も不孝もしない僕でした
戌年のさてどの犬にあやからう

松江市 小林 孤呂二
元旦有情すなおな顔になっている

お伽ばなし聞かせる幸せひとつ増え
風のふきだまりへ役人目を向けず
女いちずに楽しむ金を積んでいる
休暇とる訳は奥さんから届く

新宮市

大矢十郎

義理を欠く時期か向うも欠いてくれ
封筒にはいるボーナスとは哀れ
旧年中のお礼悔みのように言い
人相に添わぬきれいな歯がはいり
暖房が効く頃に着く勤め先

伊丹市

檜谷寿馬

御節料理母かまばことなつて坐す
妊った嫁に揃える雑煮箸
初詣亡父の羽織を借りてゆく

洋風に空奪われし父のたこ
六日目の賀状が旧友を遠くする

倉敷市

水粉千翁

日々新た余生培う草を抜き
くつろぎのかくもせわしき針仕事
ふり向けば消えるわが足音ばかり
巖を裂く松のいのちの翠かも
素足から女盛りを憎まれる

富田林市

岩田美代

眠りから覚めると切腹の後があり

十二月入院

終止符はまだまだ打てぬぞ冬の雲
焦点を少うしずらすとかるーくなる
退院を囲まれむしずしの湯気の中
喋り過ぎただろうか電話切つてから

島根県

堀江正朗

厳しさは七十歳の雪の朝
意地張って何カロリーか逃げて行く
気を少しきかせて欲しいな箸の先
相づちを独り言とは知らず打ち
幸せの入口だから耳掃除

島根県

堀江芳子

師も友もみな温かしわが句集
いとし児か孫かと句集手にぬくい
チャンネルを廻す孫へニュース逃げ
うたた寝の炬燵へ酒の香が残り
呼び捨てにされ安泰な寢息聞く

岸和田市

高橋操子

忠と義理犬は昔と変らない
口ひげを生やして無心にくる息子
有頂天の頭を打ちにきつと来る
唄までがキンキラキンの金ブーム
雪景色忠臣蔵を思い出す

堺市

大道美乙女

石仏にふと母の顔父の顔
波風もないまま停年登りつめ

熟成の夢抱き樽は刻を待つ
あらそえぬ血筋が歩む修羅の道
編棒の噂世間はほっとかず

倉敷市

野田素身郎

生欠伸一月一日も暮れる

一月一日午前零時の救急車

仕事始めの訓示へ欠伸噛み殺し

手術にも耐えられました初詣

初日の出片肺元年の深呼吸吸

藤井寺市

児島与呂志

春のいろ草のみどりが気にかかり

ええことをしそうな顔で騙される

働けば女は良い夫だと思ふ

幸せな電話してくる八十歳

孫の目に私が一番いい男

鳥取県

鈴木村諷子

永らえて君と唄った海ゆかば

七人の敵適当に車間距離

きいてやる疲れた紙幣の行状記

元旦もみそかも朝が晩になり

句を作る日本一の淋しがり

岡山県

浜野奇童

親友を別れ別れにする入試

吹けば飛ぶ種です南の風を待つ

大学に籍置いたままプロの道

妥協した涙とシャンデリアは気付き
子の帰省喜ぶ腰が伸びきらず

鳥取県

川崎秋女

今日生きる倅せ白い飯が炊け

グツグツと大根煮えている平和

部屋毎にカレンダー掛けて年明け

野良犬の遠吠えかとも海荒れる

吠えるだけ吠えて雑種のもつ虚勢

大阪府

中川滋雀

二十四時悔いはなかった灯り消す

とろろ芋ねばりを綴る夫婦箸

下街の匂いで暮れるたこやき屋

娘の便り孫の写真がみな語り

通り雨なじみのコーヒーが呼んでいる

八尾市

高杉鬼遊

三月の部屋から冬を追いつ出そう

新聞の寢床で人が生きている

ロボットに負けた男の日向ぼこ

何をしてかしたか夫がよく喋る

国鉄のような経営ならできる

岡山県

嘉数兆代賀

雑魚の意地涙で帰る雨の中

思い切り泣けよと神が闇をくれ

春雷やあの日の傷がまた疼く

傾いた独楽が意外に澄んで舞う

つまりいた石の言葉を聞いている

出雲市 原 独 仙

ロボットを造って職を奪われる

お見合いへ付添う母のメーキャップ

ばあさんやこれ見い餅詰め死んだ記事

名犬に野犬の恋が羨まし

熟年の手綱捌きが和を保ち

米子市 八 木 千 代

ふとよぎる禍福の歴史眼鏡拭く

ライバルの謙虚しみじみ恥ずかしい

反省の日記氷雨の音がする

母犬といっしょにすめぬ血統書

鬼女の面いつか祈りの舞となる

米子市 石 垣 花 子

腕組の父の背中がまだ迷い

コンタクトレンズと知らず気に入られ

杉木立空の青さをまだ知らず

おしめあてながら百まで生きる欲

太棹で叩く津軽の泪うた

米子市 林 瑞 枝

挫折感老母の武骨な手が救う

花一輪迷いの道で得る悟り

戸締りをも一度亭主として廻り

鳥啼いて夫婦の会話を詩を呉れ

白壁の嘗ての暮らしの余韻抱く

誕生日児は迷惑な餅を負い

尾を振って捨て犬子等の輪にまじり

派出婦となる決心へ見栄も捨て

相部屋にひとり残され大みそか

傾いた屋根で意地張る鬼瓦

美祿市 安平次 弘 道

二日酔い記憶の糸がもつれてる

確率論いつかは凶を引くだろう

裏作の補償は鶴の知らぬこと

すぐなおるような薬のコマーシャル

反論をせぬと共犯者にされる

大阪市 川 口 弘 生

飼犬のその律義さにある弱さ

花鳥風月皆それぞれの酒の味

計算機と逆縁にある宝くじ

カマキリの命は猫に弄ばれる

おにぎりと換えた猿知恵笑えまい

奈良市 森 田 カズエ

粗衣粗食それでも肥える家系なり

沈黙をすると不服かときかれ

独身のナースの腕で児は眠る

髭剃ってくれたナースの手の温くみ

勉強を言くと虫歯がまた疼く

倉吉市 奥 谷 弘 朗

米子市 雑 賀 美 世

どっちかと言えば動より静の人
うるさいがちゃんと財布は握る妻
運のよい奴とはめたりけなしたり
口実の非核原則にもあきれ
ベテランの作は地味でもソツがない

岡山市

時 末 一 灯

頑なに背中へ愛の字が読める
天職と信じる道にも曲り角
お前も齢だなどふるさと呟いた
見舞客帰る廊下の高笑い
厚生白書その日五十で逝った人

松原市

玉 置 重 人

ヘソのゴマスこし自信は持ってよい
想夫恋凍てにしままの北の海
ピエロにもなります制服着ています
大阪にゼニ投げるとこ地下の川
笑っても泣いても初孫が主役です

島根県

小 砂 白 汀

風花や雀の声がはずみだし
顕示欲に追われなめくじ壁を這う
肚割ってあげれば重荷披露され
背信を恥じて夕顔夜ひらく
爪楊枝ほどの役目に縋りつき

松江市

舟 木 与 根 一

また一つ狐火増える新開地
クリスマス煙突がない子の不安
多産系へのへのもへの揃う初春
仕事の鬼で鉛筆まるいなり

竹原市

小 島 蘭 幸

父の旗長男の旗風がある
バチンコ屋ここにも男いくさの眼
若者がどんどん逃げてゆく橋か
妻の友達へ髭など剃っておく
おしゃまさんが吸いだこの指をもつ

八尾市

香 川 醉 々

戦友と除州除州の盃交わす
ルポライターほろ酔いもせず夜の街
まっしろな地図にのってたわらべ唄
子を抱いてあやして消える雪女
自信過剰な地図で山へ行く

八尾市

宮 西 弥 生

明け方のカラスに何故か胸さわぎ
これからはもう恐いものなし日のラッシュ
喪が明けた日より陽ざしに背を向けぬ
残された同士の絆あねいもと
女坂子期せぬ曲り角哀し

松江市

恒 松 町 紅

ブロック塀の笠で隣と仲違い

穏やかに孫と過して三ヶ日
お正月娘に逢う旅へ凡夫婦

リハビリをしながら口はまだ達者
しあわせの一つに酒のいける口
毛皮のコートに女の性が染み

大阪市 江城修史

亡姉一周忌(二句)

寒菊の香りの中のほえみよ
凍てる街亡姉の想い出のみ強し
拭き消せぬ邪念へ木魚叩くのみ
老いわびしひとりよがりの積木積む
帰省子が去んで空しい夜の底

西宮市 藤村メ女

石仏にそつと心を置く旅情
黒わくの記事が目につく父が病み

弟死亡

音たてて秒針命消してゆく
合掌の涙へ遺影明るすぎ
振り向けば祖母一人佇つ野辺送り

大阪市 津守柳伸

真心が伝わるまでの闘病記
繰りごとは言わぬと決めた初仕事
ペーソスは女あるじの昼と夜
振り払う努力はしない倅よ
ひとり寝の寒さがわかる無言劇

八尾市 大路美幸

聖書からぬくさを貰う風の夜

淡雪の刹那の舞は相聞歌
憎まれて鏡生涯つきまとう

自虐かなカレライスを辛くする
ややこしい話の中に女居る

島根県 榊原秀子

読初めは夫婦愛の新刊書
生かされる倅せしみじみ初あかり
笥の水それとはなしに新春の音
ひとりかと聞きわだかまりない受話器
罪で塗る世相の夜明け祈らせる

松江市 梅本登美也

たとう紙に女の見栄をたたみこむ
犬走ることとも走る春の風
欲ばった船が傾く冬の海
番犬を少年配達撫でて去り

鍵っ子にビツコの犬がついてくる

和歌山市 若宮武雄

水仙の匂いへ恥じる今日の事
三度目に吉ひき当ててみたものの
みな水に流して空の身の置き場
生活戦線ここは玉碎赦されぬ
犬よりも聡しある日の妻の勘

桜井市 河合茂雄

青い色明日の夢にとつておく
先頭を走れば走る程孤独

親馬鹿の夢には遠い子の寝顔
夕焼の赤さに未来がまだ続く
どの顔も先陣きつてる走馬灯

西宮市

杉 浦 婦美子

相続税納める人の愚痴をきく
老人バワー福祉の方が息が切れ
生い立ちをきれいにたたむ舞扇
履歴書に載せぬ体験だつてある
一枚のメモで家族の時差埋める

大阪市

本 間 満津子

仕合せで倅せなのに気がつかず
親離れ子ばなれ遂う遂う孫ばなれ
困るのです誰も叱ってくれなくて
食へものを買ひすぎるのは貧しさか
触れて見たい梅の蕾が落ちそうで

守口市

野 呂 右 近

子や孫の歳指折って老い二人
残る齒も抜いて最後の親不幸
大寒の厨でくしゃみ続く妻
肉身の絆に時効等知らず
電話ベル留守の隣にしきりなり

三重県

川 上 溪 水

やんわりの言葉へ断る間を逃し
脈無しとみたセールの重い口
見えすいた上司の嘘を聞く真顔

立ち話別れかかったまま続き
体力にならぬ体重もて余し

和歌山市

西 山 幸

芹なずな淡いかなしい母だった
花束が春の戯れ言聞いている
まるいことばかりを願う朝の槐
世間からすこしずれてるまけおしみ
予定表脆い期待を溜めている

和歌山市

浦 野 和 子

犬張子恵方へ向ける初春の部屋
千言の重み賀状の片隅に

この上は翁媼を願う鈴

俺には自由あるぞと野良犬尾を振らず
みかんとりんご今年も愛の定期便

和歌山市

内 芝 登志代

一日を大事にしたい老いの初春
知らなくてよかった倅せだつてある
臍の緒を切れば自由を主張する
乱れてる心かくせぬ瞳の動き
煩惱へ角度を替えて得た悟り

和歌山市

福 本 英 子

獅子舞が来る父の顔母の顔
繋がれている倅せを君知るや
妻の座でかみそり何気なくいじる
水引きのやがては貰う白と黒

棟上げの朝隣りからくる苦情

平田市

久家代仕男

十二月昼寝宵寝もしておれず
正月へ正月にが早や四日

松原市

北野久子

脚本になかった台詞得意がる
目撃のはなし背筋に走るもの

北風も坐食は出来ぬ麦を踏む

兼業農腰に竹光ばかり差し

有事論何処のはなししかジャズ喫茶

米子市

桑原伊都

自画像にだけは聖女の目を入れる
孫ふたり核のさみしき置いて去に

出雲市

吉岡きみえ

気がつけば空気にとけて妻がいる
一人身の気ままバーゲン買って悔い

失職へ朝のリズムが狂い出し

受話器から待つ間しつこいオルゴール

カラオケに乗らないままに唄い終え

米子市

政岡日枝子

雪のない除夜で煩惱解けにくい
初霞嫁が無口になった朝

出雲市

園山多賀子

不意に来る電話都会に敗けた声

氷点下離婚届の印も冷え

移転通知雪の深さも書きそえる

神が召す天命までは夫婦の歩

商談の切り札女をはべらせる

大阪市

西出楓楽

元旦に積んだ積木がもうくずれ
地に還る落葉華麗な過去を秘め

高知県

赤川菊野

疑えば私がみじめになるばかり
参観日ママの意気込み背に受ける

主語述語あいまいにして義理の仲

ウォークマン浮世の沙汰は存ぜぬと

完成予定段々延びる毛糸編み

美しい夢を育てる毛糸玉

青森県

五十嵐操史

朝帰り愛犬正直に目を瞑る

後退を許さぬ夢の中にいる

今日を掴んだ苦勞の汗みてる

受皿のことで纏れが続いてる

じよっ張りの筋を通して校長折れ

富田林市

板尾岳人

ひとり旅ほろほろ雪が降って来た

石を蹴る男がひとり白い旅

丸木橋男とゆれる人嫌い

火を抱きぬ夕焼け小焼け冬の天

しんしんと歩けば歩くほどの峰

着飾ってくる初句会松の内

島根県

藤井明朗

金婚のどちらも長寿の相を持ち

初詣から交通事故故見てしまひ

鳥群舞にほんへ冬の使者がくる

大阪市

金井文秋

沈丁花春を先取りして薫り

スランプのすぐ傍にある打開策

過去の罪消す程賞与はいってず

儲けるより使はないのが金を蓄め

宝塚市

傍島静馬

偏見を捨てりや世間が丸く見え

練習もせずに手が落ちた手がおちた

職安をあぶれて帰る息白し

そこまで来たついでが悠々飲みはじめ

堺市

高橋千万子

再会のふたり絆にまだ触れず

お見それを詫びメッキの事にふれ

元日の日の丸何かをふと自覚

未来図はマンガの方が一歩先

松江市

柳楽鶴丸

クレジットの晴着もいる成人式

年に一度妻の歩幅に合す旅

本心を言って笑わす腹話術

心残りは男を育てて見たかった

大田市

藤田軒太楼

書初めに誓いも新たな和の一字

所望せぬ齢をもらって屠蘇機嫌

主婦の座を嫁にゆずった世の電化

野暮用と逃げてパイを囲む会

京都市

都倉求芽

エプロンの下にお元日が待っている

怖わごわのダイヤルやれやれ話中

相ついで隣りも釣れて喋り出し

ぐい呑みへ噂の出どこ酌ぎにくる

竹原市

森井菁居

石仏と話して少し楽になる

いつの間に育ち願書を書かされる

振り向けばがむしやらに来た怪煙る

雑記帖僕の本音が詰めてある

柳井市

弘津柳慶

山の温泉の朝霧南画となつて明け

いつの間にか軍靴の音が出初める

三ヶ日過ぎて今日から又独り

酒に明け酒に暮れたる三ヶ日

京都市

松川杜的

元旦の残業三日月さんに勞られ

忘れられたように元日を昼の月

姫リンゴの最後が落ちた今朝の冷え

一と草でよし七草粥は母の味

下関市

国弘半休門

預り金財布に入れて使いこみ

金持ちの競馬に手を出す春一番

スーパ一の隣が時間外で売れ

走つても一年三六五

島根県

西村早苗

逢うたとてすべなく便りおりたたむ

酔えばまた距離あるひとがよみがえる

にぎやかな男が一人来てしらけ

不倫から覚めれば降つていたしぐれ

笠岡市

松本忠三

肉筆が膚で感じる母の誤字

尻馬に乗つて味方の顔をする

割切れぬまま灰色として残り

天井へ孫の手がつく肩車

週刊誌の露骨へ明治の親が居る

先生と呼ばれ道楽見直され

聞き上手つい乗り越した駅ふたつ

アイラブユー只ひとすじの矢を放つ

東大阪市

小幡里風

三ヶ日金箔踊る美酒に酔い

お正月もうウインドは雛まつり

出席が遅れ盃どつと寄り

酔つてきたホステス訛で話かけ

奈良市

宮口笛生

風呂を焚く割木故郷の冬があり

訪れる友あり正月の残り物

ようのんでよう食べよう寝た三ヶ日

酒の友今日は車で来たと言う

枚方市

水野弘

銀婚の揃いの箸も彩褪せる

絵葉書の楷書の主は元判事

やけくそでスコッチのボトルなど割らぬ

ルノアール裸婦の片手にある羞恥

熊野市

坪田冬花

はじめでの現場ヘライバル先に着き

病院で毛色変つた友ができ

職安で笑いの顔が見あたらす

句の中で父いつまでも生きつづけ

松山市

谷真風

看板の誤字に試験はありません
新年だ独り住まいも花をわけ
手毬くれた娘も六十が近からう
空転を避けてこたつにじつという

鳥取県

清水一保

空堀になつても落ちぬ主婦の城
君が代と国旗が同情される国
振り向いて呉れよ慌てて暮れた年
晩酌に僕との戦さ振り返る

岡山県

直原七面山

ペタル踏む女の腰の逞しき
砂浜に二人の愛のシルエツト
春風にそそのかされて恋の日々
母逝つてからは浮氣をしない父

大阪市

天正千梢

元朝や自然の摂理に身をゆだね
素朴を愛しヤボと言われてる
びしつと叩いてレール敷いてくれ
なめらかに恋をささやけない魅力

寝屋川市

柴田英壬子

ライバルへ力の足らぬ矢をつがえ
厄払う鈴の音あまり冴えすぎて
目を通すだけの仕事に愚痴がある
一と昔短かし熟年落着こう

大阪市

西森花村

春闘の間は静か厚生課

金造る方で名医の名が上り
老人問題昭和一と桁にも聞かし
お土産が何か出そうで後援会

岸和田市

福浦勝晴

有る人で有りそうな顔したがらず
ガンでない安堵で吸る朝の粥
マイカーがなかったころの満はたち
一卷の終りでつかと他人の死

大阪市

西川善紫

倅せは六度迎えた戌の年
おおミステークがむしやらに金を貯め
訳あつて妻に内緒の金使う
御仏にいのちを預け今日も生き

今治市

越智一水

人間が躓く石を蟻は越え
深呼吸するひまもなし五十坂
遺産分割それから兄弟来なくなり
毛糸玉ころころ老婦の聞き上手

神戸市

仲どんたく

年男嬰鑠として古稀を越え
一年の速さをかこつ置炬燵
時知らすロマンがあつた水時計
迎春のお顔をつくるお身ぬぐい

東大阪市

斉藤三十四

御年始へ下戸も覚悟の盃をうけ
正月の餅へ入歯の補修する

犬年の生れと大物名をつらね
旧姓と違ふ賀状ハワイから

倉敷市

藤井春日

胃を切つて余命かすかに灯がゆらぎ
年男屠蘇も煙草も禁止され
笹鳴きのこちらは老いの野良仕事
お互に白旗持たぬ嫁姑

生駒市

草深醉升

なかなかのセンスお持ちと煽てられ
ほどほどに昼は昼酒夜は寢酒
鼻唄とゆかぬ浮世の綱渡り
日だまりで老眼鏡の小半時

寝屋川市

宮尾あいき

堀江御夫妻の二人三脚を読む

二人三脚泣かされました夫婦愛
ブルドックお前の年だ笑ろてみな
イナイイナイバー雨上りの月顔を出す
月食をケロリ忘れた丸い月

島根県

大森孝華

平行線ただ沈黙の時流れ
接点を得ぬもどかしさひとり酌む
母の手のある古里はぬくい風
若い氣へいつしか古稀が来てしまひ

兵庫県

辻文平

千柿を吊つて不惑の灯に座る
恍惚が近くてはすむ初詣

笛を吹く臉にいつもある故郷
山彦の返りはすでに春の声

大阪市

横地雅風

平服の署長に拳手の警邏道
仮面もう要らぬ年金だけで生き
相談に來たのに仮面みな脱がぬ
大学を出せばと豆の掌に耐える

鳥取県

林露杖

書初の一字歪みて納まれり
初髪妻うきうきと厨ごと
青春のかけらを胸に抱いて老い
断ちきれぬ絆曳きずり夫婦独楽

倉敷市

稲田豊作

底辺に子宝があり夜なべの灯
遅咲きの花もあるよと励まされ
精算の話おなかの子は知らず
年金をもらいパチンコへ急ぎ

泉佐野市

室谷徹舟

自動車も正月らしい走りよう
木の匂い豊の白い我が新家
当分は俺も掃除をする新家
新しい木の香幸せ抱いて寝る

島根県

錦織文子

最終の余韻を追うている煩惱
山茶花は真白な誇りに自惚れぬ
叱り方も考えながら学令期

鉄瓶の湯気よ娘ら遠く住む

兵庫県

河原みのる

岸和田市

古野ひで

ポーランドの制裁どころか北の島

ウァイオリンそれから音色いや気さし

お迎えがあるまでデンと居座ろか

発止と投げる瞬間湯呑み撰り

檀原市

岩井本蔭棒

大いなる時間が動く星の位置

凡俗の心ネオンに洗われる

お日様に似てる田舎のおばあちゃん

後尾から見れば雄々しい一号車

東大阪市

崎山美子

運命はどうあれ努力を積み重ね

逃げ腰も成り行きだけは気にかかり

うたた寝へ毛布愚妻にほれ直し

止り木で別れた女の影を追う

守口市

羽原静歩

安らぎの視野に軍手が乾してある

ジョーカーを引く美人のルージユかな

慈母観音そろそろお昼近うなり

シグナルの青へ確かに盲導犬

浜田市

中川幸一

当節は鉄瓶のない隠居部屋

酸い甘い人の世に似たみかんむく

モンタージュ似ているような似ぬような

悠久の遺跡を発く好奇心

愚痴ひとつこぼさぬ老母においつけず

美しい道があるかも曲り角

除夜の鐘若松ようようかしこまり

雑煮餅五つも食べて老母元氣

百貨店トイレを借りに行っただけ

兵庫県
大江秋月

医者に叱られてもたばこ止められず

長男が替係長に栄転

三十の春係長の椅子が来る

お見舞に行けば退院支度中

島根県

角耕草

狎抱いて盲導犬とすれ違ふ

口喧嘩できる姉妹の年始客

あとつぎに行かすゴルフのおつきあい

みずうみの霧を押してく鴨の陣

河内長野市

井上喜醉

犬の奴人を見る目があるらしい

玄関の朝の皮肉がようこたえ

名物は安いクーポン顔出さず

いざとなれば女は強い意志表示

鳥取県

金川満春

三ヶ日姉妹揃った笑声

老い二人つがいの様な置炬燵

出雲大社団体参拝に参加して

きつちりとネクタイ締めて初詣で

初詣退屈させぬ女連れ

岸和田市 原 さよ子

転宅(四句)

転宅へ住めば都と励まされ
家具整理思い出ばかりで捗らず
勿体ないこれもあれもと捨てがたく
転宅へ持つな持つなといったわられ

東大阪市 奥山 弥山人

天井の低さにのれんの味を見る
年よりの愚痴に元気の証拠見る
枯葉散る病窓にみる点滴器
悪女にも淑女にもなる爪の色

米子市 青戸 田鶴

お賽銭出雲の秋にはずんどく
名刹の由来テープでもの足らず
万葉のしらべ素朴な恋唄う
弱点を見せない友に気が疲れ

倉吉市 渡辺 菩句

舌鼓打たした憎い縄暖簾
真四角な脳で忠告など聞かず
米びつに母さんの柿が熟れてます
何しても秋はこころを白くする

大阪市 北 勝美

倅は息子に招かれ旅三日
ゴンドラに寒さ忘れて並ぶ列
古稀過ぎて感激新た初日の出

目出たさは心も富士も日本晴れ

枚方市 稲葉 星斗

お正月犬まで腹をこわして居
屑蜜柑一箱買つて三ヶ日
お正月こちらは雪と初電話
いち早く革新派の賀状来る

出雲市 石倉 芙佐子

受皿に愛を満たさぬまま老いる
ゆつくりと羽を広げて人を待つ
水引草なまじ媚など売りはせぬ
野の花に語り継がそう童唄

岸和田市 福島 せつ子

年の市やつと抜け出た裏通り
長生きしてねと子等が帰るなり
手袋の片方を落す歳の暮れ
明け暮れの身を勞つて懷炉入れ

高知県 松岡 三吉

仕事始めの靴がとっても重い朝
ストの無いくらしの中の耕耘機
高砂やここから先は子のレール
世の中は変りましたよやせ葉

京都市 山本 桐下

風が止まると開いてみたい住所録
這入るかも知れぬ養老院を見に
一粒の涙は系図を裏切らぬ
去年の梅娘の計を知らず咲く

大阪市 神田秀峰

マスコミは人の懐よく発き
聞き直す返事へ答を覚えてみる
良い人が目立たず悪人だけ目立ち
定年の限度身体で良く解り

大阪市 藤田頂留子

詰め合せばらして特価の一個売り
年取って涙腺ドラマにこわされる
人出より賽銭箱が大写し
真つすぐな道退屈と何ほざく

仙台市 川村映輝

動物愛護着せたり抱いたり立たせたり
年金があり長寿を喜ばれ
病氣してから夫婦らしくなり
老若男女病院に病人あふれてる

大東市 土岐トク子

トレモロが満場魅了し寂となる
点となりストラディバリウス弦の冴え
新春を彩る国際電話鳴る
究極は祈りあるのみ今日生きる

岡山市 井上柳一郎

正月も呼吸こらすよう堀の町
雑種でも心豊かに底で生き
参加する意義と自信ちらつかせ
美女だなあ同性の眼も追っている

岡山県 荻野鮫虎狼

止り木にとまり悲しい唄である
雑兵の仕事が僕に当てがわれ
丁寧な言葉サラ金コマ―シャル
琴の音がうどん屋からも流れ春

東大阪市 竹中綾珠

子の家を廻り正月過ごす辛
初詣願うは子の事孫の事
「二人三脚」の句集夫婦は温いもの
これからは気をつけますが守られず

米子市 菅井とも子

鬼に留守頼みストレス捨ててに行く
派出婦が素直にさせた老いの愚痴
復唱をさせておまわり道教え
はくほくの夫で口数多くなり

柏原市 大峠可動

幾つかのドラマと生きた靴を持つ
白無垢のやがて悲しい雪達磨
善人の前でストレス捨ててはならぬ
一城の主に喜劇はなかりけり

寝屋川市 江口度

逆転はもうない静かに席を立つ
恋すみし猫とふとんをぬくめ合う
街の地図等高線が欲しくなる
叱られた子にも体温計が要る

富田林市 中村優

熟年の知恵天眼鏡や広辞苑

勸進帳の舞台で総理まだ冴えず
家計簿で夜叉めいてくる妻のペン
口閉じて人の推理を眺めてる

西宮市

野呂鶴汀

血色が良いと血圧うらやまれ
静けさや時計の音が恐ろしい
珍客も長居をすれば飽きが来る
旅先は恵みの雨をうらむなり

大阪市

欄蘭

社長出勤先ずお稲荷さんへ掌を合せ
銀行犯国際的に高飛びし
何食べてもかまいませんよと見放され
三文判押して小さな決断し

島根県

太田亀甲

哀歓を共に重ねてダイア婚
ダイア婚次は地獄か極楽か
初詣今年は犬を連れて行き
肩書のとれた新年ちと寂し

和歌山市

垂井千寿子

故郷に帰れば笑いが拾えそう
セールスヘドアホーンが氷ってる
ガス水道まだ来ぬ土地で恵方良し
野良犬になりたくてなる犬もある

和歌山市

松原寿子

コンパクトの中の季節よ誕生日
虚しさを埋めてください紅椿

今もなお炎を溜めて女坂
口紅の襲へ面影たたもうか

和歌山市

坂口公子

初頁ここは真面目な日記帖
初詣で神様気楽にお聞きやす
戎さま健康だけをとは哀し
寝る頃になって乗り出すボールペン

大阪市

神夏磯道子

大散歩そんな時間を羨まれ
招待券夫婦で映画久しぶり
糠に釘奇跡が起るのを待とう
春雷が正月呆けを戒める

大阪市

柳原静香

有情無情師走を巡る札の束
年金の軽さを知らぬ孫の歳
顔のしわのぼして初春の湯に浸る
隔世遺伝孫のひとりの背が低し

大阪市

岡田ふみ

何となくど忘れしたよう大晦日
午前九時世の中ゆっくり動き出す
釘一本打てぬ夫と五十年
父母別けて引取る話する酒席

鳥取市

森田熊生

あきらめて帰る夜道の星が冷え
海荒れて荒れて帰らぬ父がある
私にもシーズンがある冬の海

待たされることにも慣れて漫画買う

島根県

木村はじめ

島根県 谷岡芳枝

金婚の夫婦で過去は語るまい

淡々と無職と書ける齢となり

金婚や押してやったり押されたり

幸せがこぼれる指の隙間から

松山市

竹内寿美

神戸市 山口美穂

ゆつくりと故郷は風が廻り出す

まだ鳥になれぬ焦りのグライダー

花道は無いけど母の舞台です

娘を乗せる舟来て欲し来ずに欲し

海南市

牛尾緑楼

町田市 竹内紫鏑

合わす手がいつか子供のことになる

継いでゆく自信はないが父と飲む

エプロンの妻には心許しとく

善人の行く手にあつた落し穴

七尾市

松高秀峰

西宮市 妹尾春江

乗り替えて能登の訛にある温み

噂より先に倒産やって来る

母一人育てた息子に裏切られ

悪い事だけは占いよく当り

島根県

松本文子

唐津市 浜本久仁於

働きバチすぐに啖呵を切りたがる

やつと来た白鳥の背にジェット飛ぶ

怒りなし喜びもなし日向ぼこ

カニの足ちぎって何とも思わない

唐津市 久保正敏

善人に腰かけ鬼が酒を酌む

オリオンの冴えに愚かな願いかけ

冬が来る煩うわたしに小走りで

どん底のリズムを変えた孫の顔

神戸市

さりげなく誘う電話へある迷い

木枯しへ思うことあり筆をとる

野良猫の妊り餌をそつと置く

メルヘンの世界白髪だから住める

町田市

犬百態賀状年々ふえてきて

料亭のネオン筆順たしかなり

コンピュータゲーム老婆からなじみ

安全第一ロボットに打たれるな

西宮市

葉箱宝の如く傍に置き

鈴振れば粉雪の舞う奥の院

悲しい時うれしい時も手を合せ

情熱を燃やす五十路の彩はなに

唐津市

ふる里の味で団地のお節料理

嫁がせて今日から様と書く手紙

村馬かも壱岐かも知れぬ雲の果

民謡の土は舞台で落とされる

人脈も金脈も無く罪も無し
独身を貴族と信じる不幸せ

逢うた日が別れと風化の始まりさ

根廻しができててセレモニ―すぐ終る

唐津市

仁部四郎

半鐘は塗り替えてある過疎の村

風呂敷で包むと書類重くなる

内閣を信じぬままに屠蘇を酌み

中流の手本はやはり二宮金次郎

鳥取市

小林由多香

温情にふれた涙をふいて起つ

地味好む妻に宝石輝やかず

締めてなお締めて不況に立ち向かう

唐津市

新岡回天子

囑託に備ってやると停年期

一言をひかえ女はやいている

あの腕に触れてみたいな青年期

岡山市

川端柳子

時に逢う女見覚えのあるショール

しあわせの尺度を病院から拾う

アドバイス五つ六つは若返る

玉野市

小谷仙山

十四百円賽銭箱は同じ音

ひと時の安らぎ餅がふくれてる

建前と言う服を着て肩がこり

諫早市

原田明春

寝正月孫つき次に来て起こし

お年玉孫談合して額をきめ

しあわせの足音でなし初詣

島根県

梶みどり

除夜の鐘流してくる阿修羅の血

娘や孫へ願う幸せ雑煮たく

七色の思い出抱く指輪かな

醜態を叱りながらもつれ帰る

ミンク着るマネキン妻の顔に見え

家計簿を付けつつ亭主の目を見る

偽札でも作って見たい日の空虚

君が好き酒が言わせた気の弱さ

ぎくしゃくの一日馬鹿げたままで済み

黒ぐろと女毛脛に情をみせ

ブスでさえ選ぶ権利があるという

蛍光灯俺を真似てか点滅し

元日は車も静か暮れて行き

心筋梗塞明日は我が身か背が寒い

息子の手術外でただ手を合わす

連帯の自由圏なら羊です

体制の為なら民に銃を向け

香川県

岡田拳法

出雲市

板垣夢酔

貝塚市

行天千代

狭間希久志

西岡洛酔

和泉市

西岡洛酔

板垣夢酔

西岡洛酔

侍に戻れとアメリカ弱音吐き

姫路市

大原葉香

孫の数自慢老人無力なり

勲章が一度は欲しい熟年期

行革という名で議員飯をはみ

岸和田市

清野こう

出して来ず出さぬ人から来る賀状

静けさが我が家へ戻る新学期

いたわる嫁の言葉嬉しく朝を出す

羽咋市

三宅ろ亭

よく刈った跡の蓬は顔揃え

孫成人臍くり少し間に合わせ

辞書引いて七十にして知った文字

竹原市

時広一路

錆ついた捻子で油も受付けぬ

野良猫が野良猫らしく逃げてゆく

腕組を解く決心がつきかける

岡山市

岩道博友

春らしく無い色で行く医者部屋

定年の話へ余生の趣味も変え

腕組の隣の空席すぐ着けず

島根県

山根峰雪

新刊書読んで老いのねじを巻く

三代でおちぶれた訳を語る松

公職がなくなり趣味がふえて来る

兵庫県

藤後実男

すれ違い思い出せない霧の街

三十年ピエロであった功績章

ほろ酔いに脳裏かすめる人を恋い

和歌山市

杉田周穂

猛反対画家のタマゴと駈落す

説教は一人前の怠け者

退院の日が大安と思ひ切る

唐津市

浜本義美

迎春の家の習慣子に教え

定年をすぎれば妻に指図され

叱られてうるさがられて無職なり

唐津市

木塚素石

体調を七草粥で取り戻し

初詣で宝くじより頼られる

名を言わず先生だけで通る宴

唐津市

田口虹汀

鶯は古木の味を忘れかね

母の言う幸せ一寸物足りず

まる二日喧嘩相手のいない部屋

「川柳塔」の選者は4月号から

若本多久志氏に交代します。

(2月号七二頁の予告は誤りでした。
訂正してお詫びします。)

本田 恵二朗

生き恥をさらす梯子を登りつめ
面当てのように美人と結ばれる
一と言が多いのばかりで座がなごみ
僕は弱くないが妻が強すぎる
ネクタイをつけて来たのに待ちぼうけ

黒川 紫 香

舞う風も枯葉がないと頼らない
追伸ですこうし本音洩らしとく
いっぺんは毛皮も着たい若い尼
台所でブツブツ言うている茶瓶
絵心があつて年賀を出し遅れ

正 本 水 客

白一色の世界旅人は北へ向く
雪のきびしさが円い民話を生んできた

雪明りまた来てけらっしやいと言う笑顔
雪の岬に抱かれて湖 音を絶つ
荒あらしさの中の一途が雪になる

浜 田 久米雄

気休めと言わずくすりをあてがわれ
倅という字に変えて見る余生
欠席を詫びるころはもう書かず
がたの来た足をしっかりせよと撫で
豆腐さえあればと外を遠慮する

若 本 多久志

まだ生きています賀状が二、三枚
何千句生んだか パーカーの書き心地
ネクタイと別れて余生二十年
石橋を叩く要さえない余生
抽斗の整理 古傷が顔を出し

長野文庫

青春に何を塗るのか医大の門
赤い実が裸にされて春の雪
先ず夢が雪に降参加温ぶどう

月原宵明

賀状書くのが元日の大仕事
ありふれた賀状ですます老い疲れ
一月の句会日曜みなつぶれ
元日もジョギング走り抜けて行く
賀状の字臉に浮ぶ友の顔

若柳潮花

南無大師仰げば銀杏まつすぐな
ビル谷間リズムを替える風の私語
店長と次長 次長は禿げている
靴はいた惰性会社の門くぐる
悪筆で身を立てている司法書士

大坂形水

水仙の白を画筆に盗まれる
陽が落ちてからが二人の御堂筋
木洩れ陽が女の彩を変えている
高額な生保殺されるかも知れぬ
逢えぬ夜は昏だけが燃えている

尼緑之助

帰るには早い時間に会終り
空タクシー来たので一緒に乗っただけ
音頭取る役を言われる齢になり
暖くなれば癒るいわゆる老人病
桜頃にはお札参りをしようと妻

犬シャンプー寡婦の冥利は南櫟
死に神がしきりにうたう波の牙

川柳太平記 (46)

正岡子規と阪井久良岐

東 野 大 八

子規・久良岐・剣花坊の三人が、はからずも日本新聞で一つカマのめしを食っていたということは、後年の川柳史の発展に、きわめて好い結果をもたらした。

この三人の日本新聞へ入社した際の年齢を参考までに眺めてみるとつぎの通り。子規は明治二十五年で二十六歳。久良岐は明治二十九年に福本日南（日本新聞副社長）の紹介で時に二十八歳。剣花坊は古島一雄との面接で明治三十五年に入社した際は三十四歳。従つて社内では、久良岐が剣花坊より約六年の先輩で齢も久良岐が一歳上であつた。

さて子規と久良岐の歌道の対立が行われるのだが、その前に久良岐の略歴にふれよう。

久良岐は明治二年（一八六九）一月二十四日神奈川県久良岐郡野毛町四（旧地誌）に時に神奈川県を勤める父の官舎で生れた。

「江戸っ子久良岐などとひけらかしているが、なんだ奴さんは神奈川県（の田舎もんだ）」と剣花坊や六厘坊は事毎にコキ下ろしているのだが、とにかく久良岐とは、その出生の際の郡名による。還暦を機に「岐」を「伎」と改めたが、詳解漢和辞典に拠ると、「岐」は「ふたまた」または「わかる」で、「伎」は「わざ」「うでまえ」とある。右念のため。

阪井家の初代藤兵衛というのは加賀大聖寺藩士。その四代目（久良岐の祖父）は保之で幕府三郷清水家の地方代官。五代目すなわち

久良岐の実父は保祐といい、父の死去で二十四歳で当主となり、下田奉行詰で黒船のペルリ来朝の際は、その接待役の一人であつた。明治維新で神奈川県、明治四十一年横浜税関副長（泰任官）だったが、上司と争い退官後上京して大蔵省の課長級となり九段富士見町に住み、五十六歳で辞官、従七位。六十三歳で赤痢で死亡。久良岐の母は山沢検校の三女で大正五年、八十五歳で死去。（名は不明）

久良岐の実名は辨（つとむ）で、幼児から実父が趣味とした漢詩・歌道に馴染む。漢詩は父が尊崇した賀茂真淵を踏襲した。

「我等、今日川柳を研究するに古句研究を第一とし、ついで宝暦の時代研究に移るは翁（賀茂真淵を指す）の斯言に感化され、且つ深く其絢論に服するところあればなり」（川柳「獅子頭」所載）右の斯言とは

「常に曰く古言に明らかならざれば、以つて古意に通ぜず、古意に通ぜずんば以つて古史を明らかにしがたし」

いわゆる久良岐の新川柳を排除した。江戸川柳趣味」と自称した根底には、右の斯言が柄井川柳に帰納されていたわけである。

明治三十一年夏、久良岐二十六歳のとき、妻琴子をめとる。彼女は東京市戸名督職伊藤

莊翁の長女で、明治四年創設された東京高等女学校の第一期生で鳩山春子と同窓。結婚後生花東江流師範、川柳を夫君に学び、柳名素梅女としてその賢妻ぶりを謳われた。

この琴子夫人との間に久良岐は四男三女をもったが、二女瑞子が生後間もなく夭折（明治33・8・31）した際、子規はねんごろなる悼歌を寄せている。しかし、こんな間柄だが、子規对久良岐の短歌騒ぎが社内で起つたのは明治三十年である。

松山市教委編の「伝記正岡子規」は、子規の全生涯とその事蹟に詳しいが、長くなるので割愛する。その関連部分を要約するとつきのようになる。もっともこの子規の伝記には久良岐の事は一切ふれられていない。

子規は明治二十五年日本新聞に入社後、同二十八年の日清戦争に従軍記者として渡満。帰途咯血して病床に親しむようになった。日本新聞在社八年間のうち子規が社に姿をみせたのは、約三年間で、あと五年間は病床からの執筆。入社以来魂を打ち込んだ俳句革新運動は、明治三十一年一月で一段落し、その二、三月から「歌よみに与うる書」十篇をもって短歌革新運動に乗り出した。この草稿は、浅香社や明星派から厳しい批判を浴びた。

「貫之は下手な歌よみにて、古今集はくだらぬ集にこれあり候」再び歌よみに与うる書」という痛烈な十章の短歌革新への子規の意図は、当時の短歌界は香川景樹の流れをくむ「桂園派」が中心で、また宮中には御歌所がおかれ、旧派歌人の古今集流が幅を利かせていた。この貴族趣味の歌よみの階層を打ち破り庶民のなかの真の歌よみの詩人に、短歌を返すべきだというのがそれである。

子規の短歌革新の主張は「文界八つあたり」（明治26年）「文学漫言」（同27年）に述べられている。少年期から子規は短歌になじんで育った。この子規の短歌革新に共鳴する人も少くはなく香取秀真、岡篁、長塚節、伊藤左千夫たちが、根岸の病床にある子規を囲んだのが、いわゆる根岸短歌会で俗に根岸派と称された。

さて、久良岐の方だが、彼は日本新聞入社早々の三十年二月「旧派歌人十余家につき、その自賛歌各人十首を乞ひ日本紙上にこれを連載した」（河東碧梧桐「子規言行録」）これを見た病床の子規は激怒し、三日間も不眠の状態であった。不折がこれをなだめたが、この直後から「歌よみに与うる書」を猛烈な勢いで執筆しはじめた。こんな子規の火のよう

な革新の意欲を、入社早々の久良岐はまったく関知してはいなかった。

「吾人は第三者として日本趣味紹介の立場にいますので、文芸論とは没交渉でしたから（子規の短歌革新のこと）気がつかずにいましたし、陸先生から私に一つ子規に日本の短歌史を教えてくれとお頼みになられたので、自分も八代集位は研究していたので、早速根岸へ出かけて、古今集から初め講議した。（中略）八代集を紹介したが「空に知られぬ雪」これは駄洒落だと風に一切否定だ。自分は洒落は江戸の生命だから承服はしないが、其頃は主観も客観も分らなかったで黙従した」（『日本及日本人』明治41年。陸先生と短歌について。阪井久良岐）

久良岐を日本新聞に紹介した福本日南は万葉集、陸羯南は古今集に凝っていたので、俳句革新運動が一段落した時点に入社してきた久良岐だけに、陸主筆は「子規に短歌を教えてくれ」と頼んだ訳だ。しかし、それが裏目に出たので久良岐は大いに面食った。

要するに日本新聞入社から二年ばかりは、一種の歌人久良岐であり、川柳のせの字にだに触れてはいない。その点、五年あとに川柳を引揚げ入社してきた剣花坊とは好対照だ。

誹風柳多留廿六篇研究 (五丁)

小野 真孝・本多 正範・石田 成佳
大屋 六郎・八木 敬一・鈴木 黄
石田 晋一・南 得二・多田 光

故岡田 甫

82 玉菊へ手向ヶほんのうほたいなり

小野 玉菊 『川柳大辞典』に曰く。吉原角

町中万字屋勘兵衛抱えの遊女。才色兼備の太夫で諸芸に通じていたが、享保十一年三月大酒のため二十五歳で死んだ。同年七月の盂蘭盆に吉原の茶屋は軒毎に灯籠を吊して玉菊の精霊を祭った。これが玉菊灯籠といって、後に吉原三景谷の一つとなった名物の初めである。

「それにしても玉菊はいい女だったよなあ」などと言いながら、煩惱の鬼追えども去らずの遊治郎どもがさんざめく。これこそ玉菊の

菩提をとむらう最大の手向けであらう。

多田 贊 玉菊の菩提を吊いつつ煩惱の方を

満足させるわけである。

岡田 同。

83 芥子の花一チりん取レハ二りん散り

小野 元来芥子の花は散り易いものであり、

女人の容色うつろい易きをたとえたものであ

らう。さすれば手活けの花となったのは仏御

前であり、散ったのは清盛の寵を奪われて仏

門に入った祇王・祇女を指すものと思われる。

本多 詠史句ではなく、芥子の花の触れなば

落ちるようなもろさをよんだ写生句であらう。

芥子の花はもういから、一輪手折れば二輪散
つてしまふ、そのままの句である。

芥子の花蝶薄氷を踏ムおもい

一五四・27

けしの花危く蝶ハ羽を休メ

七九・10

多田 詠史とは関係ない。そのままの句

岡田 同。

84 わるくない足とどめハ盃が出る

小野 このままの句。「それでは、この辺で

お暇乞いを……」「まあ、そうおっしゃらず

に、何もありますんが先ず一献」、とくれば

上りかけたお尻もおりようというもの。

本多＝賛。上戸にとっては願ってもないことであるが。

多田＝賛。

岡田＝同。

85 紫と鹿の子落合ふ中の町

小野＝「江戸紫と京鹿の子」なる語より、紫は江戸町を、鹿の子は京町を指していったもので、いずれも吉原内の町名。共に仲の町をはさんで左右に一丁目二丁目あり。紫も鹿の子も色としてはかなり派手な色であり、中の町のはなやかさを飄じたものと思われる。

むらさきとかのこを仕切ルあげや町

一三・一〇

本多＝「落合ふ」という語からして、遊客と遊女が落合ふ中の町の茶屋の賑わいをよんだ句である。

大屋＝本多氏の説、賛成しかねます。中の町の通りをはさんで京と江戸が向い合っているで良いのではないのでしょうか。

八木＝礎稿・大屋氏説に賛。ただし、「中の町の通りをはさんで京と江戸が向い合っている」のではなく、礎稿が正しい。京町の遊女が中の町通り江戸町の茶屋に行く、江戸町の遊女が中の町通り京町の茶屋に行く、というろ

いろな場合がある。いわゆる「道中」で、それらが中の町通りで落合ふ、という句であろう。

多田＝江戸町と京町説賛。「落ち合ふ」はたとえてあろう。

岡田＝同。結局は、江戸紫と京鹿の子を取りむすんだところが、作者のねらい。

86 桃から梅へトばんにくだる也

小野＝桃を桃山、梅を梅田とすれば、それぞれ京大阪の地名となり、淀川下りを指すものと思われる。但し、実際に舟着き場がその地にあつたかどうかは知りませんし、又これだけでは余り面白い句でもないようですので、何か史伝或いは俚言をふまえての句構かと思われます。

本多＝「桃」は山城伏見にある城山（伏見城趾）の桃をいう。「梅」は梅田にあらず、王仁の詠んだ梅で、「難波津に咲くやこの花冬ごもりいまを春べと咲くやこの花」の歌による。桃山と難波津の梅にひっかけて淀川下りをよんだ句。

多田＝本多説賛。

岡田＝本多説の通り。

87 小菊壺帖櫃にして高楊枝

小野＝楊子見世の景。小菊紙一帖を傍に置き間に人が座れないようにしておいて、看板娘をひやかしている浅黄裏を詠んだもの。勿論「武士は食わねど高楊枝」の利かせである。

本多＝女郎が客の前で楊枝を使う仕草をよんだ句。懷中から小菊壺帖をおもむろに取り出して、口元を隠して悠々と楊枝を使う様に、気位の高さを感じさせる。遊女の上品なうちにも気位の高さを「櫃にして」と洒落たのであろう。

八木＝紙花用の小菊壺帖を持って、悠然と遊ぶさまを詠んだ句ではなからうか。

鈴木＝小菊といえば祝儀であらう。裕福な武士、大名のような武士の客のことと思ふ。

南＝八木氏説の小菊一帖を持って悠然と遊里に遊ぶさまの句と思ふ。

多田＝本多説賛。

岡田＝本多氏は「女郎が……」としているが、小菊は客が持っている懷紙。客から祝儀として貰つたにしろ、遊女が楊枝を使うのに小菊は用いないでしょう。やはり金持らしい客の悠然たる態度の表現。高楊枝を強く見れば武家となる。

水煙抄

正本水客選

和歌山県 天満 三千代

行先を告げずに出たい用があり

(先月分)

熊本市 有働 芳仙

底の底はたけば師走とおり過ぎ
上向いても涙は容赦なく落ちる
お銚子を寒さの所為にして増やす
愛情に飢えたボタンは落ちたまま
輪をかけた話へ乗っていた不覚

富田林市 藤田 泰子

牡丹雪どんどん足跡消してくれ

用もない銀行が来て十二月

大阪市 村上 田鶴子

霜よけに稲穂の付いた藁拾う
ぶつかれば木端微塵になりそうで
束縛も自由も欲しい欲ばりで
咲く花も散りゆく花も一つずつ

熊本市 有働 芳仙

お元日昨日までなる狂騒よ
待つことに飽きてかるたは伏せたまま
遠い人梅が綻びかけている
振り向き癖の犬の瞳は見えないよう
見える限り遠くを見たい檻の熊

大阪市 大野 武太

コック長家では妻の味でよし
落着いて居れず自分の椅子が消え
大好きは犬の方から尾をふられ
バラの棘ぐらいに若さ傷つくな

競輪の客を押しこむ初詣で
分相応ことしは妻と水間寺
我ながらケチだと思ふ小銭よる

バイトして大人の嘘も少し知る
大臣に誰がなろうと日が暮れる

竹原市

古田比呂子

子の視野の真中にいる母として
二歳にもさわらせてみる初氷
水仙の香りに少女期よみがえり
顔見せに行こう病父の誕生日
かせひきがいて相伴の卵酒

高槻市

竹内花代子

紙吹雪ぐらいいはほしいフィナーレ
三ヶ日休めばヒップ太り出し
あらたまる年を迎えに娘が戻り
年始客黒豆だけをほめてくれ
猫柳川原の水も音を変え

青森市

工藤路子

七草のうちの五つで粥を炊く
進学路子を先頭についてゆき
風邪ひいて子のやさしさをかみしめる
檀山をひとりで登る覚悟もし
お浸しに菜の花春はまだ遠い

今治市

矢野佳雲

思いつめた顔で相手に逃げられる
とぼけてるとは思われぬ歳になり
一廻りするだけなればここで待つ
おしまいに拇印を押して帰らされ

山くたくマイトに地藏少し揺れ

尼崎市

奥山美智子

吠えている犬の純粹さに打たれ
決断の手だてをくれた通り雨
珍しいことを言い出す石頭
着ぶくれのふところ寒い風が抜け
ナンテンが熟れると父の忌がめぐる

大阪市

清水康恵

木枯の中を夫婦で橋渡る
叱られた遠い昔の父の顔
ごめんねと素直に言える子に育ち
陸橋を越えたら母が住む町だ
霜柱サクサクふる里の音がする

島根県

東原福子

初詣稲佐の浜の貝拾う
平和のシンボルふくらとした鏡餅
平和に育ち有難さピンと来ず
もう人が恋しくなった三ヶ日
どこにでもある伴奏で満ち足りる

大阪市

西村芙佐女

歩き出すまでわからない子の進路
浮いている枯葉もたのし若い川
遠い遠い心の声を聞くまでは
豆を一つまた一つ祖母の実直さ
春の風女神は私の中にいる

西宮市 林 はつ 絵

すぐ騒ぐ鬼が一匹胸にいる
酒があり田楽がありいろり端
淋しさを分け合つて飲む日の珈琲
夢の中若いわたしが翔んでいる
老体がちよつと華やぎ絵馬を買う

京都市 松 川 芳 子

元日を勤め定年の年が明け
忘れたと素直に言えぬ母の老い
子の話に乗れない父に老いの影
沖すきを囲む帰省の暖い部屋
一人来て孫孫なりに気を使い

八尾市 高 杉 千 歩

竹刀もつ孫に明治は本気なり
一日を何ためらわず絵に向う
賀状もう届かぬ人に寒の月
曖昧に女小賢し伏目勝ち
味噌汁がうましひとりの小正月

今治市 渡 辺 南 奉

父軸に回れば足りる小さい欲
楽天家金は天下の回りもの
父が積む積木を妻と子がかばう
突然の笑いは怖いものを知る
逆境に慣れ諦める事に慣れ

吹田市 西 川 景 子

男の子ばかりで嫁の雛飾り
今年まだ強い運勢続くらし
母のぐち言うだけ言えば泊らずに
ああこわと冗談めいていなす嫁

和歌山県 寺 田 裕 美

涙ふく拳の中にある闘志
ワテンポ話題がずれてる日向ぼこ
決断をうながす視線が追いつめる
エプロンは白でなければならぬ母

大洲市 米 沢 暁 明

大渦小渦ほんとの平和まだ遠い
トンネルに峠の眺めうばわれた
強がりも勝負の決るまでだった
地藏さん胡座かきたくないですか

寝屋川市 稲 葉 好 子

こんな日はローソクの炎消えるまで
師の影を踏むほどには近付けぬ
残された夫婦茶碗が淋しがり
老人のおごりか喜怒哀楽に生き

鳥取市 武 田 帆 雀

スロースローながら闘志の火は消さず
たこ焼に遠慮はいらぬ程の仲
豆殻が焚き付けによし里の風呂
手を一つ叩いてよっしゃと負けてくれ

熊本市 北 川 一 進

(前月分)

医者の瞳に希望があつた回診日

鼻と鼻たしかめ犬の初対面

窓の灯の向うマンション派手に立ち

道連れができて変えてる散歩道

大阪市

鈴木節子

エプロンを外す間もない三ヶ日

宿命と諦めている椅子の足

満ち足りて女は過去をふり向かぬ

へそくりが春の来るのを待っている

姫路市

古川奮水

木登りも手足を運ぶ順があり

階段を登る途中で靴が脱げ

病棟の静けさ破る咳の音

療養の窓に大きく叫びたい

大和高田市

岸本豊平次

振り出しに戻つたような月曜日

エプロンも似合つてダイヤの光る指

冗談の中に心を刺す言葉

登山までして先取りの初日の出

竹原市

古田鈍舟

吾が心にいつわりなしや墨の色

父の夢子の夢明日の雲の色

父という重荷に耐えることに慣れ

石仏の顔のゆがみを気にしない

西宮市

林はつ絵

さば鯨が上手無口なおばあさん

うれしさへ赤いジャケツをベアで着る

つかけて行けば信号赤ばかり

活力に逃げられそうで赤を着る

島根県

岩田三和

春近しゆるりと動く沼の鯉

歌に振りつける鏡がまず笑う

窮屈なサイフの中で住めません

捨てられてたくましく犬野をかける

岡山市

原田凡太郎

麻酔から醒めたら朝が待っていた

術後室長き夜さらに長かりき

点滴へ思う子のこと妻のこと

点滴の泡が花火のように消え

大阪市

日阪秋子

キロで買うお餅がなんともつましく

昼の銭湯の人氣少なく湯気が逃げ

こんな日が来るとは独りの置きごたつ

訴えるように街路樹枯れている

兵庫県

中田白李

振り袖を若い個性のままで着る

大安日流れ作業の式が済む

透明な指からお金がこぼれだす

肩書がとれると酒癖消えてくる

今治市 葛本昌道

招かざる客になりたくない疎遠
地球曰くボクがそんなに憎いかい
一匹狼になるより外はない誇り
ふれあいの座に敗け犬というランク

尼崎市 丹下玉子

ふり袖をスーツに替えて遊びに出
運命に逆らい続ける太い眉
宵えびす雨で出店もしめり勝ち
消ゴムで消せぬ言葉が人を刺す

大阪市 津山刀水

餅が焼け電子レンジがチンと鳴る
洋風を風の中から呼び戻す
険の裏の母がいまでも見えますか
裏道を知ってるライバル先に立ち

松原市 本多洋子

元旦の夜もラーメン売りの笛
三ヶ日本一冊で満ち足りる
言うてしもたら終いや阿呆な顔しとく
父の日は黙って軌道のみつめてる

高知県 曾我部 つぎお

あの山を斬って捨てたい冬の陰
ひっ越した庭にころがる鉢一つ
辞めるしか無い雑兵の正義感
作業場の囲いが欲しい冬の風

豊中市 満仲きく子

定年の迫る男にある気迫
風あがれそこから故郷が見えるかい
欲張らずすねずふくれず三ヶ日
来客へ一期一会の割烹着

長崎県 岩崎和子

灰皿があれば落ちつく控え室
曖昧な返事に余計腹がたち
年の功にされ腹の立つ笑顔
討論に入って欠伸遠ざかり

橿原市 西本保夫

いま老母が生きれば喜ぶ事ばかり
どう見ても人の好すぎるボクを責め
屑カゴのメモはうつぶん書いて捨て
自問自答でしばらく自分を落ち着ける

羽曳野市 麻野幽玄

月の出を見たい名所をバス通過
恋猫の家出へ愚痴を溜めて待つ
母親に手を引かれて来る仲直り
その氣に成れば逃げてく恋と差し向い

尼崎市 矢萩貞子

いのち綱杉の実とりの男たち
寝正月をきめた私に暇がない
初鏡孫に櫛入れ語りかけ
親と子で将棋している松の内

尼崎市 西村 かすみ

美しく古い赤いベレーがよく似合
はみだした同士がくぐる縄のれん
恋心酒に言わせたことを悔い
しとやかな末座の客の白い足袋

島根県 福岡 芳枝

子に残す雑木林の細い道
耳ふさぎそこねて噂の風を入れ
子どもらの派閥下校の道前後
願いどおりがめつくなればもの悲し

大阪市 堀口 欣一

福祿寿のようなのがコック
関西へ高跳びというほどでなし
焼芋屋健在銀座の灯がともり
五十年やとりますと大写し

米子市 足立 由美子

老母からの電話その日の活力に
陽だまりで寒い心を暖める
兎に角も働けるのが倅せて
寝る前の反省明日はみな忘れ

交野市 山本 テルミ

父にない風は母から吹いて来る
父親が酒呑み息子まで酒呑みで
二階まで一人上れた孫の顔
年の暮温いひざしがうれしくて

鳥取県 羽津川 公乃

七転び八起き夫婦の長い旅
のんびりの留守番あれしてこれとして
振袖の娘よく食べよく笑い

西条市 片上 明水

善人の知恵控え目なことばかり
制服を脱ぐと落語の好きな父
北国の噂は雪が溶けるまで

大阪市 白石 潔

日曜は嫁にあわせてする朝寝
寝そびれて命をきざむ音をきく
ゴールま近二人三脚もたさねば

大阪市 白石 潔

(前月分)

同じ悔いまたくりかえす十二月
十二月がらあき電車おちつかず

米子市 寺沢 みどり

手習いで個性うすれた娘の賀状
のんびりと風邪の一日いたわれ
繋がれた大あきらめの日に耐え

八尾市 宮崎 シマ子

せわしそうに子雀師走の餌拾い
やるものもやり取るもの取って寝正月
白い手袋はめて運転手交替し

鳥取県 加藤 茶人

保育器の命あくびを見てあきず

どこまでがボケか老父のひとり言

ハイと言う返事もピカピカ一年生

和歌山市

老い目立ち討論し合えぬ母となり

嬰兒にまだ人間の罪はなく

真剣にこれでもいいのかテレビ消す

大阪市

軍歌派が酔うて白けた忘年会

寝ることにした正月の晴つつき

亡き父の癖そのままに兄老いて

島根県

喜んで良いのか飲めぬ娘婿

話し合いついてお酒の味が出る

トラックが師走を積んで突走り

松原市

師走の空の風が私の足を留め

失うものが無いと悟った日は軽し

髪染めたたったそれだけで弾む夜

大阪市

善人の背へへのものへの書く

善人の背はいつでもあけてある

奇数ならどうする賽を振ってみる

岐阜市

生返事男に鈴はふらせる気

老兵の手の鳴る方にあるいくさ
灰いろで泳ぐと川がねむくなる

岐阜市 市川 鱈 魚

(前月分)

とっても明るい窓で気の合う嫁姑

なんとなく逢えるねがいのまつり笛

檜山の仏はとても話好き

喪があげるバラが少こうしずつゆるむ

羽曳野市 佐野 白水

車椅子でなくてもスロープほしい老い

返金がなくてもあきらめられる顔

生きている証今年もおめでとう

堺市 田辺 哲 寿

ノーベル賞出されて国が慌てだし

おしほりが恨めしそうな厚化粧

どちらとも取れる微笑で切り抜ける

西宮市 山田 喜代子

無口な娘でと不愛想かばわれる

若い気の抜けない夫の社交下手

狸寝のいびきリズムをとっている

倉吉市 今村 夕 路

懸命に吠え番犬の役もすみ

大根の産地はここも開拓地

暖冬の裏があるぞと自重する

八尾市 松下 蕉 露

女王蜂一度刺しても死ななんだ

三面鏡いずれの顔も若くない

大栗田ママさんバレーが持っている

和泉市

岡井やすお

古稀が来てまだ末吉と出るみくじ

革新も段々右へ寄っていく

外黒字内は赤字の妙な国

弘前市

田中叶

冬晴れの公園犬の糞があり

厠から見れば隣りも起きている

停車場で聞いた家出のそのつづき

東州市

小山悠泉

喝采のない人生が黄昏れる

たとえばの話で愛を確かめる

丹精に答える土の温かみ

島根県

松本はるみ

その時は日本どちらを向くつもり

このままでやりすごしたしふところ手

胸もとにしこりをためたままの罪

大阪市

橋元美恵

富士仰ぐ今年の闘志湧いてくる

一通の手紙大きな音をたて

片隅で何かせつない幸福よ

名古屋市

越村枯梢

夢一ぱい詰めて壊れたシャボン玉

堅気では食える男の吹き溜り
逢いたくて五百羅漢の中を選ぶ

西宮市

朝山千世子

三ヶ日 日の丸忘れた街をゆく

七草粥明治生れで疎まれる

羨やまれる子等に囲まれ新春巡る

札幌市

北村深星

転寝の妻の荒れ掌をそつと撫で

ほんとうの男土下座の中に見る

逆風もあるぞ明日の竹トンボ

島根県

藤原鈴江

たよりない我が子がある日ふと頼り

ころころと転がる心に転がされ

お喋りの時だけ冴える歳となり

八尾市

葛幸子

廻り道してまだ続く孫自慢

廻り道井戸端会議よけて行く

世話好きが居てグループまだ続き

米子市

野坂なみ

欲追えば周りの絆冷えて来る

反省もせずに逆手に攻めて来る

弱点を補い合って歳をとり

青森県

岩淵一星

合性な友さずかった赤提灯

想い出に逢いたくなくて眼をつむり

ふる里の稔り配って社宅秋

諫早市

江副二牛

短気者欲がないので見直され

無茶すと子に叱られる年になり

もてあます長寿を妻に支えられ

愛知県

国分甲子郎

身寄りなく裸木が好き冬景色

金魚の水替えても思案まもらず

寢覚めよく床は自分でかたづけ

大阪市

今西静子

青写真父の書齋はけずられる

他人になる印へ過去みな忘れた

頂上のない坂を又一步ずつ

岡山県

池田半仙

母に妻嫁と雑煮も変る味

小春陽が嬉しく散歩の足がのび

アイシヤドーパンダ連想さすガイド

青森県

波ただお

雪国に雪降って来て喜ばれ

手術後の懐炉を入れて散歩する

出初式水が勢よく上がり

大阪市

鍛原千里

新しい風に向ってジャンプする

吉と出たおみくじそと持ち帰り

空白のページは私の宝物

すね嚙りよく食べ飲んで丸肥り

八戸市

島田昭治

戴いた銀盃で酌ぐ亡父の墓

亡父恋し根性だけを残しても

泉佐野市

大工静子

今年こそ素直にハイと歩を合わそ

人前を離れた時の古稀の腰

通せんぼする子の顔が雛に似て

境港市

細木歳栄

ロボットがある時突然牙をむき

チビギヤングの勢揃い寝正月とはいかず

熟年もまたよし柿の熟れぐあい

鳴門市

八木芳水

付き添いのいびき文句も言えぬ義理

善い事が一つできたと笑顔見せ

無理をして帰った顔へ妻の愚痴

鳥取県

和井観洋

人ひとり転ぶって大変なことなのよ

寒いねえ寒いですねとまだ余裕

漫才はブーム冬物は大バーゲン

大阪市

横井富久子

臨時列車遠慮しながら走ってる

亡き父と話したくて経を読む

大阪市

大倉圭介

張り切って又矢面に立たされる

ナツメロを歌う父には父の声

大阪市 平井露芳

若者は若者らしく弾くギター

胸にバラつけられ部屋が別になり
終列車で帰る女のよく喋る

今治市 八塚三五島

寝てる間の雨を話題の今朝の膳

尼崎市 中谷利美

草の息吹きが聞こえるように芽がのぞく
風雪に耐え笑顔のしわも百歳で

他人から見ればわたしの恩知らず
風流を知らぬ夫婦で喰べ歩き

兵庫県 野々口 ゆう也

日溜りの話にしては生臭い
神妙な顔して俺が判るかい

老いなりに何やかやと春三日
嫁素直家風の味を継いでくれ

高槻市 田崎 あき子

縁側があるから我が家はあたたかい
寒空に漬物がうまい古都の茶屋

四十越して恩師を呼んだクラス会
親切な人と一緒に方向痴

島根県 石飛水煙

買ってから二三日楽し宝鏡
天も地も生み出すような初日の出

聞くだけは聞こうと神は鎮座ます
猫の年あってもいいのになめんなよ

兵庫県 藤原捷一

老眼鏡かけた友見て安心し
女先生へ母がきびしい事をいう

冬の陽は尾根をころころ暮れて行く
赤い実をついばむ小鳥追いもせず

兵庫県 森脇和子

会費だけ納めてくれという母校
新築が戸主の主張を物語り

趣味一つ孤独を守る手帖持つ
手術待つ父の軽口胸をさす

兵庫県 奥野テル

静かなる池は小石も投げられず
この指で男涙を拭いた日も

ふり出しに戻らぬ意地を持ち続け
着ぶくれた老友寄り合って落葉たく

唐津市 山下勝一

ツケがきてボーナス抜いた訳が知れ
大初日六十余洲にせり上り

郡山市

岡田すみれ

父恋し父の齡越す今日の日も
子の便りいのち大事とくり返し

大阪市

吐田公一

国鉄が知恵を絞ればまた値上げ
ポツクリと逝くには色気あり過ぎる

山口県

高崎喜一

大地から春を告げてゐる小さい芽
鼻唄の妻に何やらある仕草

大阪市

山本炉齊

亡き父が残した職に今日も生き
三代目まだまだ父に追いつけず

八尾市

椎尾公子

かりにだよと本当のような嘘をつき
京や京古き家並みの灯がともる

岸和田市

吉水照江

円満な母の顔描く幼稚園
年女ワンチャンと一緒に走ろうよ

東大阪市

三宅哲夫

おたがいにつぶしのきかぬ年であり
拾いものしたように思う古い本

八尾市

山下みつる

年の末散髪するも思案して
背も幅も父を追いつけしな子供

年末の仏具磨いて父想う

正月の老父の空席もの足らず

打水のしづく晴着の裾ぬらす
旅の宿はべる女中の愚痴を聞く

唐津市

田中紫浪

宛名だけ書いて賀状は書き終り
洗車したその翌日に雨が降り

今治市

新居田胡顔子

空缶が自然の中で拗ねている
核武装青い地球も褪せて見え

米子市

田中亜弥

整形でポイントの無い顔になる
荒行のしぶきへ数珠の輪が厚い

島根県

岩佐富子

贈りもの孫との絆嬉しがり
住みなれて田舎の色に染めあがり

河内長野市

糸谷春草

小心は事情聴取で自殺する
横綱の休みがつづく不幸せ

河内長野市

糸谷春草

不渡りを出した主人の緋鯉見る
五つ子は無事退院を見送られ

（前月分）
河内長野市

糸谷春草

前向きの姿勢後もすきが無い

高知県

山下登舟

大阪市 山脇正之

兵庫県 円増貞子

春の雨戻ってきた猫足なめる

吹田市 西岡 豊

食つては見 見ては呑む子の寝正月
ビルディングに北向地蔵間借りする

寝屋川市 立床 晴風

驚いた素振りで対話興に乗せ

ヤッホーの木霊が春を広がらせ
岸和田市 藪野 けい子

円満がコタツを囲む親と子と

とろ箱のカニはどっこい生きていた
泉佐野市 真崎 浪速子

自転車が追っかけてくる忘れ物

金賞が招待状で来る誘い
兵庫県 山根 左春

夫逝きなお姑は強くなり

秋桜に埋まるように夫逝く
鳥取県 石井 雅水

初詣黙々福を抱き帰り

診察の妻待つ車で聴く落語
熊本市 高野 宵草

カロリーは充分足りてまずい味

ボーイから見張られナイフにあなどられ
大阪市 坂本 仙吉郎

下市の庭一面に白い箸

壺坂の大観音はインド産
堺市 久井 富子

きれいなものに覚えて思うこと
あきらめてノックが続く日よう日

奈良県 宮川 古都路

晦日そばまばらに消える窓明り

生き字引辞書の記事にはないことば
旭川市 朝倉 大柏

聞いたふうな口して孫の伸びざかり

金運のなさを占いずばり当て
大阪市 岩田 八文銭

努力をばせず不運であきらめる

老いの愚痴初めて聞いた事にする
島根県 堀江 百代

生半可知ったふりして叱られる

今日もまた無事で炬燵の茶をよばれ
大阪市 権安 達一郎

元旦の町はこんなに澄んでいる

友の死をしみじみと思う年のせい
高知市 北川 竹萌

正常の歩調に戻す七日粥
大阪市 服部 頼一

塩田の夢は昔の真帆片帆
岡山市 石黒 若恵

父母の顔浮べて故郷へ土産買う
大阪市 村島 秀村

「水煙抄」の選者は4月号から黒川紫香氏に交代します。

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

香川 酔々

麦めしにするか陛下も食べてはる

谷 垣 史 好

そのむかし、貧乏人は麦を食えとのたまうた大臣（おとど）が居られた。時は移りて、畏くも陛下も麦めしのこと洩れうけたまわる。臣下たるもの、麦めしにせざるを得ません。そのおとどの奥津城は高野山にある。

ドラマにはならぬ一生だつてある

工 藤 甲 吉

ドラマは、作家が作つて見せてくれます。わたしは楽しめばいいのです。わたしたちがドラマのヒーローやヒロインに成らなくても結構なことだと思います。芥川さんがちゃんと「ある阿呆の一生」を書いてくれました。

増税へ赤子に言う御名御壘

高 杉 鬼 遊

「大家はん。この句よう分りまへん。教えとおくんなはれ。赤子はあかごと読みまっしやろ。御名御壘でなんのことだんね。」

「熊さんは、昭和二けたの生れだんな。それじゃあ、この句は分りませんな。赤子は、あかごではなくて、せきしと読みまんがな。日本国民はすべて、天皇さまのせきしという事になってましたんやがな。御名は、天皇さまのお名まえ、御壘は天皇さまの御判のこと。天皇さまには、名字がおまへんのや。お名まえだけだんね。熊さんやつたら、奥山熊虎といまっしやろ。奥山が熊さんの名字なんですがな。そしたら、この句よう分りまっしやろ。」やつぱり大家さんだけのことおまん。しかし大正も古うなりましたんやな。」

これからの地図で見つけた細い道

河 野 君 子

これもむかしの物語り。あるところにひとりの少女がごじやった。いつも天神さまの細い道で遊んでごじやった。ある日のこと、たんぼの絮がふわつと飛んでいくのを見たそう。少女は、その絮につかまって、ふわつと空へ浮んだそう。天神さまの細い道がますます細くなつていった。そしてとうとう見えなくなつてしまつた。いつか少女は、女になつていった。あら、この地図の細い道は、あのとき空から見えた天神さまの細い道と同じだと気がつきました。女は少女に戻つていたそう。

一人になつてからの話を妻がする

小 出 智 子

これはむかし話ではありません。こうなると男は、ぶざまです。平均寿命は、女性の方がずっと長いのですから、完全に女性上位で

す。妻の言うことです。男は、関白の座を降りて耳を傾けねばならないのです。

退職をすれば部長も粗大ゴミ

柳 楽 鶴 丸

これもまた男に分の悪い話。粗大ゴミなんて妙なことが出て来るし、テレビでは、女権拡張論者のオバさまたちが、カンカンガクガク。チャネルをかえると、キンキラキンの学芸会歌手がキンキラキンと声を張り上げている。おまけに定年近くなると、熟年とかで、まるで熟した柿が木から落ちてつぶれたみたいな感じ。これを末世といえるにやと言いたくなります。なあ鶴丸はん、お互いに頑張りましょうぞ。

女房にバレて切られの与三をきめ

板 垣 夢 酔

タイムトンネルをくぐつて、江戸時代に戻つたようで、久しぶり古川柳の味わえる作品にお目にかかりました。春日ハッチーと手拍子を打ちたくなつたのです。リズム感もみななものです。

不器用で死ぬまで折れぬだまし舟

西 山 幸

再び現代にもどつて来ました。こんどは、女性特有のやさしさを見せてくれます。いいですね。いつまでもだまし舟など折ることのないように。

みの虫よ宇宙の謎が解けたかね

岩 井 本 陰 棒

人間は考える輩であると、えらい人が言いました。みの虫君は何を考えているんですか。

秀句鑑賞

—前月号から—

藤井 一二三

鶯の緒がカラカラ鳴るよ亡母の鈴

村上田鶴子

亡き母との絆が、今も現実に鶯の緒を通して見ることが出来る。たゞ幾とせ経ようと優しい母の鈴が聞こえてくる。その音が聞こえる限り人としての道は踏み外すまい。カラカラ鳴るよで亡母への想いが生きている。奔放に生きて淋しき溜めている

松川 芳子

所詮人間は淋しく弱い者ではない。第三者から見れば翔んでいるような人であってもその背には淋しさを秘めているものである。その淋しさを隠すためにも奔放に生きているのかも知れない。

平凡な暮しをゆする計が続く

妹尾 春江

つつましく地味な生活をしている市井の片隅へ、あちこちから訃報が入ってくる。義理を欠くことも出来ず、笑われぬ程度の包みも

のをする。その指先に貰うより出す方がなほか幸せと言つて聞かせながら。しかし家計簿に吐息が落ちてくる。中七の「暮しをゆする」がよく効いている。

葉包紙の鶴は千羽を超えている

越村 枯梢

長いながい闘病生活の中にあつて、快癒の願いをこめて今日もまた鶴を一つ折る。葉包紙の鶴のひとつひとつは切ないまでの心なのである。そして鶴を折る気持は春へ向いている。春はもうそこへ来ている。負けないで頑張つて欲しい。私も共に祈ろう。

無職元年組板も新しく

高杉 千歩

勤め先を辞め、今日から妻として家庭を守ることに。なつたその朝、厨に立つと包丁を握る手にも力が入ってくる。組板の新しさは作者の心なのである。どうか幸せな家庭の味をそして妻の年輪を刻んでいただきたい。

音沙汰が絶えて落葉をはいている

奥山美智子

ハラハラと舞い落ちる木の葉は人を感傷に誘ふ。庭に出て掃き集めると、その一枚いちまいに音信の途絶えた友の顔が浮んでくる。幸せに暮しているだろうか。落葉を掃く音が友との想い出を蘇えらせてくれる。

ひと様の毛皮を撫でて女です

舟渡 杏花

神様は男より女に強く虚栄心を授けて下さつたようである。他人の服飾ましてや毛皮などを見ると精一杯賞めながら値踏みをし、反

発と安堵のどちらかを選ぶことになる。この女性心理を「女です」でよく表現している。育児書がたった一人をもてあまし

岸本豊平次

書店の棚には選択に迷うほど育児書が並んでいる。現在の若い母親の中には確固たる親としての自覚も信念も無く、本に振り回されながら児を育てる。まかり間違えばノイローゼになり愛児を死の道連れにす。昭和ひとけた生れの親から見ると歯がゆい限りである。手順などいらぬ引金引けばよし

星野 侑正

石橋を叩いて渡る人を焦れつたく思う若者の心なのだろうか。この句から暴走の怖さを恐れるのは取り越し苦労かも知れない。しかしたとえ乾き切つた世の中であつても、順序立てだけはして欲しいものである。

三面鏡悲しい顔はうつさない

清水 康恵

確信を持てばあしたの虹が見え

松本 元江

しあわせのひとつに綺麗な字が書ける

紀市 郁栄

楯にする口実一つにしがみつ

日阪 秋子

物忘れなかなかしい老母がいる

山下みつる

冗談だハハハと本音呑みくだし

矢野 佳雲

冬木立手を差し上げて春を呼ぶ

石黒 若恵



奥谷弘朗

野田素身郎

板尾岳人

工藤甲吉

円周の一点暮も正月も

西森花村

弘朗 私には円周の一点が何であるか、よくわからない。暮だ、正月だ、とあくせく生活しているが、これは円周の小さな一点にすぎないではないか、へこたらずに頑張っているよと呼びかけた句のようにも思えるが、どうでしょう。

素身郎 暮も正月も三六五日を円周とする一年のうちの一日にすぎない。なんで構える

ことがあろうと思いがち、除夜の鐘に一年を回顧し、元旦に心を新たにすることが常である。円周を一年と解するか、一生とみるかで若干解釈が違ってくると思う。

岳人 時間が動くようで動かない、結ぶべき一本の糸のように。現代人として自己の存在を確認しているように思える。この句の場合の円周は一年とする方が気兼ねがない。

甲吉 「円周」とは、円のまわりの線。平面上で一点から等距離にある点の軌跡。一と辞典にもある。だから暮も正月も一点に違いないが、それに対する句主の感動がもう少し出ていたらと思う。もつとも川柳は余情の詩といわれるけれども……。

弘朗 皆様の句評で円周は一年と解するこ

とにして、一点である暮も正月もが解らなくなってきた。川柳は余情の詩といわれても、誰にでも解る句を作りたい。

素身郎 円周は、一年と解するのがよいようだ。たんだんと「暮も正月も」と言っているのがよい。

岳人 円周を一生とみるならば、鮮やかな人生の短篇であり、一年と解すなら、切羽つまった言葉の配置であり選びであることを教えらるる。

甲吉 どちらかというと素身郎氏評に同感だが、暮も正月も円周の一点だから特になんということはない、ということにも受けとれる。とにかく分るようで分らないので、もう少し分らせてもらえよと思う。

お立ち酒神様ひとり乗りおくれ

石倉 英佐子

弘朗 お立ち酒というのは出発のときに飲む酒であるが、飲みすぎて一人乗りおくれたと言っている。川柳らしいユーモラスな句だと思った。

素身郎 不勉強のため「お立ち酒」という言葉をはじめて知ったが、何故「神様」がここに出てくるのか解らない。「神様」という

表現を使わなければならない必然性が、私には見当らない。

岳人—女性らしい素材と感覚の句である。神様をだしにして呑む男に生きていることへののはのとした信頼と余裕があり、平和が匂うようである。

甲吉—津軽には立ち際に「立ちハコ一杯」という酒がある。この句の神様は仲人。いわゆる「出雲の神様」と思われるが、はたして。婚礼を連想すると吹き出したくなる。

弘朗—「神様」はこの句の場合、女性の目で酔っている酒飲男を神様と表現したのではないかと私は思った。

素身郎—「神様」の解釈がそれぞれ異なっているところにこの句の問題点があるように思う。私には「神様」の正体が正直解らない。岳人—人それぞれに境涯があり、人生経験も違う。性格の相違は勿論であり、嗜好もちがう。酒好きの私はよく神様をだしにしてよく呑む。アーメン、あしきをほらい、なむあみだぶつ。

甲吉—素身郎氏も言っているとおり「神様」は三人三様であるが、私には大体、弘朗氏評あたりが適当ではないかと思う。ところでこの句で思われたことが一つあった。それは「独善」。この句の「神様」を指すワケではないが、自分だけが分っていて他人には分らない川柳が最近非常に多くなった。省略が過ぎたり、飛躍が過ぎたりするものにこの傾向を

みるのであるが、省略も飛躍もほとんどあつてほしいと思う。ひとりよがりの句を示して解釈はあなたまかせでは、なにか無責任とも思われる。解釈は如何様でも—川柳はそんなものではないのではないか。我々が名司といつてる先人の句にはそんなものはない。

怒鳴つては男 涙しては父

慳 谷 寿 馬

弘朗—この句なら私にも解る。頑固親父の姿が出ているように思う。男として怒鳴りちらす時もあるが、また父としてやさしく涙を見せる時もあると言うのだ。私の好きな句である。

素身郎—男親の生態をよく捉えている。八・八のぎくしゃくした句調も、無器用な男の姿を彷彿させるのに効果的であると解するのは考えすぎだろうか。

岳人—枯淡の境地ではなく雄勁と呼びたいような男の性の響き、父親の腕の感触、人間的な側面を知り得る貴重な人間関係の確認、ああこんな父親でありたい。

甲吉—前三者の評に異論はなく、こんな親の下には非行少年などどうう答がない。ただ

句としてはもう少し推敲がほしい気がする。弘朗—八・八の句調だから好きと言うのではない。川柳は五七五のリズムで詠うのが良いと思っている。

素身郎—言われてみると破調が気になる。推敲の要はあろう。

岳人—骨格のたしかな把握、貧しくとも、心を寄り合わせる熱い父と子の友情を感じる。

甲吉—七・七調の字余りか、元来七・七調は、原則の五・七・五では句がだらけるとか説明になってしまつて余情、余韻が失われるとかでどうしてもダメなときだけに用うべきものと初心時代教えられ、実際に今も自分はその信じている。したがって、この句はそれに当てはまるかどうか。私には疑問が残る。しかし句意は大体、皆さん一致しているし、私にも異論はない。

握手した右手左は何思う

川 崎 秋 女

弘朗—人が握手するのは相手を信頼して、同志と思つてするのが普通であるが、この句のように右手で握つて、左は何を考えているのかわからないのである。

人間の狡猾さに用心せよとの訴えだ。

素身郎「……右手左は……」と全部言っ

ているのが気になるが、人間心理を読んだよい句だ。これからは、握手する相手の左手に注意しよう。

岳人「左手に温いユーモアを湛えている。難点も指摘したいが真面目なのにユーモアがある。」

甲吉「おとこ・おんなの手の握り合ひではなく、ライバル同士の握手と直感したのだからとすると下五の「何思う」はどうかと思われてくる。いずれにしても右と左は別。『不気味』でもある。」

弘朗 甲吉氏の評でこの句の価値をみなおした。「何思う」の下五が引かかる。用心せよと訴えた句としたのは思ひすこしかもしれない。

素身郎「何思う」で私はよいと思う。

岳人「左手に理解しようという善意と努力があるように思う。気むすかしい左手にこの句への追求があるのだが……」

甲吉「この句が『何を思い何を企む冬の雲』という句の次に並んでいることをあとで知った。そこで二句を連ねて考え直してみたら、前評の「ライバル同士の握手」がなんだかあやふやになった。しかも句主が女性となると尚更である。いずれにせよ私にはやはり弘朗氏と同じく下五がひっかかる。「何思う」が句主に訊かねば分らないのでは「伝達性」に問題を残す。手紙の「一伸」が必要だ。」

背景に雪を降らせてみたい女

杉浦 婦美子

弘朗「この句は女らしい美しい句だと思つた。背景に雪を降らせて、の表現がとても良いと思う。」

素身郎「一読きれいな句だが、私には『背景に雪を降らせて』がよく解らない。また、リズムをもつと大切にしてもらいたいと思う。」

岳人「自然が語りかける言葉を正しく聴きとるために女は苦悩がなければいい顔をつくれな。女の背景に雪は深い知恵にふれた感動を伝える。」

甲吉「美を追求するおんな、深水の美人画が目浮かぶという『単純過ぎる』。裏にはもつと深いものを含んでいる。』と言われるだろう。だが、私にはそこまでの鑑賞力がないから表現にもう工夫して、そのところをわかるようにしていただきたい。その句の通りだとすればズバリも効果的だ。」

弘朗「句主の気持は解らないが、皆様の評で美しい句だ、表現がとても良いなぞと言つて片付けられなくなつてきた。甲吉氏の句評同感。」

素身郎「甲吉氏評でよいようにも思うが、

今一つ寂然としない。

岳人「巧みな細工物をみるようにで真実がない句かも知れないが、妖気をもつた女の美しさを連想させようとする作者の消極的な反抗かも知れぬ。」

甲吉「自分自身、自分の評には自信がもてないので反論もないが、岳人氏評の深さ、高さとなると私如きには到底及ばざるところで大いに教えられた。しかし同氏の評をみて、川柳とはこんなにもむずかしいものなのかと今更ながら考えさせられたのである。もつとも『むずかしい川柳』は昨今の一般的傾向でもあるが、川柳がむずかしくなることは、川柳を大衆のものでなくし、川柳を大衆から遠ざけることになりはしまいか、と私はいささか危惧する。難解必ずしも深い意味をもつというものでもなからうし、平易の中にも深い意味をもち、噛めば噛むほどにすがたい味のあることを先人は示している。自分の力不足をタナに上げての暴言、多謝。」

英霊をまた喰いものにしはせぬか

谷岡 芳枝

弘朗「英霊を喰いものに戦争をさせられた過去を知つた人でないと生れない句である。」

防衛問題が取り沙汰される昨今、このような句がどしどし生れることを希望する。

素身郎——兄弟四人が兵役につき、長兄と次兄が戦死した私が叫びたいことを、よくぞ句にしてくださった。川柳は、ある時代には抵抗の文学だったこともある。佳句。

岳人——実生活の中から掴みとった芳枝川柳の呼吸であらう。

甲吉——反戦川柳。右旋回の政治が気になる昨今。ほくそ笑む「死の商人」などを思うと背筋にぞっとしたものを覚える。ただ句としては下五にもう一工夫ほしい気がする。しかし、それが「新風」かも知れないが。

弘朗——下五の一工夫を望むより「しはせぬか」の呼びかけが「新風」として良いと思う。素身郎——新風かどうかは別にして「しはせぬか」でよい。

岳人——静かで深い心の動きなしでは詠めぬ句なり。常に戦さに対する必死の抵抗がみられ、それが一種の悲痛な響きとなっている。

甲吉——素身郎氏評に尽きるところ。けれど私にはやはり「下五」が物足りないのである。現に英霊が喰いものにされかけている現在である。「しはせぬか」は不安そのものをそのまま言ったものであり、句主の心情は十分わかるが、なにか投げやりのものを感じるのである。弘朗氏は「呼びかけ」といい、それにちがいはなからうが、私はもう一歩踏み込んで「喰われつつある」とよみ、強く共

感を求めたいのである。これは私の希望で評ではない。

主賓席だあれもビール注ぎに来ず

中村 ゆきを

弘朗——これは私の川柳観にピッタリの句だ。床柱を背にした主賓ははっとかれ、誰も酌に來ず洗面をしている主賓の顔が目に見え、平凡な句のようで仲々味のある句である。

素身郎——このような主賓でも招かねばならない場合もある。主賓が席を立ててから、座が盛り上がるのが目に見えるようだ。この句の会場は床柱のある座敷ではなく、ホテルの宴会場のような所であらうと思われる。

岳人——妥協を排して孤独に耐える主賓との空間の隅々までが息づいている。長としての作者の実感句だろう。

甲吉——一般的には逆に思えるのだが、どうしたというのだろう。主賓たるものが可哀想である。この主賓とはいったい全体どのような人物なのだろうか。それが句になったのだろうか、私にはよくわからない。

弘朗——句主を知らないから、うっかり句で感じたままを言ってしまったが、岳人氏の評のように長としての作者の実感句だったら考

えなおして前評を訂正せねばならない。

素身郎——作者の実感句だとすれば淋しい限りだ。そうではなく、冷めた目で見ている第三者の句と考へたい。

岳人——自分を勞わりすぎる作品

甲吉——額面どおりでは常識的でない。この主賓なる人物は雲上人の如き人か、あるいはよほどの嫌われ者かと思えないが、岳人氏評を踏まえて考えると、うなずけないこともない。句主を知ってるらしい岳人氏評で「一件落着」というところか。それにしても招待側の仕打ちにはそのままにして置けないものがある。

×

句評はむずかしい。しかも、手元へは短時日置いて一となると尚更のこと。特にむずかしい、そして問題をふくむ句を選び抜いて句評を求める（邪推かも知れない）のだからたまらない。自分の至らなさが情けなくなつたが、これを機会にもっとと鑑賞眼を養わねばと痛感した。

川柳塔柳箋

一冊 二百円
送料 二百四十円

高橋

操子

岸和田市

わたしの宝物

(到着順)

私の家にえべっさんと大黒さんが舟に乗っている木彫の額をお店にかけてあります。五十二年八月二十日私が心筋梗塞で倒れ、救急

病院の重患室で四日程何も知らずねむっていた時、つき添ってくれていた長女が入用品を取りに家に帰ると、えべっさんの額が、したたる程ぬれているので布でふき取ってもふき取っても湧いて来るので、不思議に思いながらも病院へかけ戻ったそうです。気になるので翌日もひまを見て帰って見たところ、びつしよりぬれています。入院四日目に意識を取り戻し一人部屋にうつされましたが、気になる長女が又帰ってみますと、今日はちつともぬれてなく晴れやかな笑顔に思わず頭を下げると共に、恐いような気がして病院へ引き返したと言います。私と共に苦しんで下さったえべっさん、大黒さん、以来我が家の守り神様であり、私の大切な宝物の額です。

森田カズエ

奈良市

自分にとって、なにが一番の宝物と言えるだろうかとしみじみ考えました。戦前戦中戦後と厳しい時代を過してきた私には、その折りおりに勇気づけ、はげましてくれた友人達の言葉も宝物です。

編集部から頂いた「わたしの宝物」を書くようにとのお葉書を、小学四年生をかしらに三人の子の母親である娘にみせました。娘は「お母さんには「川柳」と言う大切な宝物があるじやないの!」といってニコニコ笑って

います。

娘のこの言葉に私は胸が熱くなるのを覚えました。柳詠句集などをいく度も読みかえす私を理解してくれていることを知りました。娘のこの言葉もわたしの宝物です。

路郎先生の「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」の御句を「わたしの宝物」として勉強させていただいております。

神夏磯道子

大阪市

どんなに雪が降っても雨が降っても一番に登校し校門の開くのを待っていたという母は四年生の時、家庭の事情で学校をやめなければならなくなりました。そんな母が子供の教育に厳しかったのは当然です。農繁期でも家事を手伝わせようとはせず勉強が第一といって、何もかも自分でやっておりました。そして貧しい中、父の反対を押し切って女学校へ上げてくれました。

勉強より運動が好きで母に対して申し訳ないような成績でしたが、四年間の成績表とテスト全部を大切に保管してきました。学校の楽しかった思い出とともにそれが私の宝なのです。それを大事にすることが、せめて母に伝える証でもあると思うたのでしようか。

小さなアルミのトランクに入った宝ものを見るたび、月謝前になるとお米を売って月謝

袋を満してくれた母の姿を思い出します。そんな母も昨年亡くなりましたが、私がこの世を去る時この宝ものを柩に入れてほしいと、今から娘に頼んでいます。

一握りの灰かも知れぬ宝もつ

梅 みどり 島根県

「わたしの宝物」と言えば悲しい別れの指輪とネックレスです。私は終戦直後、公務員の亡夫の元へ嫁いで参りました。そして三十一年間、本当にささやかな親子四人水入らずの生活の中から二人の娘も教員となり、長女

には一人の孫もあり、倅せこの上ない昭和五十一年秋、突如心筋梗塞にて急死しました。

その三日前、二女の縁談につき松江市に向き、その折「一番よい服を買ってやる」と言ってくれました。でも服より指輪を希望しました。その帰りホテル六道湖で夕景を見ながら軽い食事をして、ほんわかとした気分が帰宅しました。然しその三日後、通勤途上にて急死という悲しい柩を抱く事になり、それ以来暫く仏壇の奥にしまっておりまし。

月日のたつのは早いもので、今年は何回もがめぐつて参ります。生前、川柳誌を読み、自分なりの批判をするのが好きな亡夫でしたので、この頃は句会等に時々指にして出掛けます。何んだか亡夫が句評をしてくれるよう

な錯覚に落ち入ることがしばしばあります。

柴田英壬子 寝屋川市

〈その一〉言葉

貧は養うに足らず、養うべきは貧にして志なきなり。忌は卑しむに足らず、卑しむべきは忌にして能なきなり。老いは嘆するに足らず、嘆すべきは老いてむなく生くるなり。死は悲しむべきに足らず、悲しむべきは死して聞こゆるなきなり。

（これを読むと生きる勇気が湧いて来ます）

〈その二〉赤いアルバム

一九七六年一月二十日から二十六日、日米交歓川柳大会に出席した時の写真集です。六年経った今でも折に触れ頁を繰れば思わず煩がはころぶのです。一日一日が新鮮なおどろきと喜びに満ちた表情が胸に飛び込んで来る。特にその中の一枚は、われながら素晴らしい出来映えのものであるから、絶対に宝物にふさわしいものでございます。因みにその年は、アメリカ建国二百年でありました。

山口 美穂 神戸市

「歩々は道場」大覚寺門跡・乃村龍澄（色紙）も十十年にもなりましようか、嵯峨 大覚

寺の華道芸術学院を卒えることになった日、御門跡様から記念として、卒業生に色紙を頂戴いたしました。

皆、それぞれ心に残る、良いお言葉を頂いたようでした。私の頂戴いたしました、この色紙、ほんやりの私は、ハット胸をつかれた思いがいたしました。

いつも夢をみているような、少女からぬけきれないまな生き方（現在も治ってはいませんが）をしている私にとって、一步一步のあゆみの大切なことを教えて頂いたのです。

川柳においても、また他のことにおいても同じことが言えるのではないでしようか。

句を作るとき、固苦しく考えている訳ではありませんが、一句一句が修業であり、道につながるものであると信じたいのです。

良いお言葉を頂いたことを感謝し、亡き御門跡様をしのぶ今日でございます。

西出 楓楽 大阪市

わたしの宝物といえは、ためらわず「本」を挙げます。結婚後だけでも買集めた種々雑多な本は、千冊にもなりましようか。

小説の中では私は、ある時はローマ時代の誇り高き貴婦人となり、又ある時は下町に生きる詐欺師となります。エッセーの著者はコーヒークップ片手に親しく話しかけてきます。

姑を含め大先輩たちの川柳句集には、歩き始めた道の遠さと深さを教えられ、フアイトを掻き立てられます。

いつか、主婦業をめでたく退職した晩には親しんだ本をもう一度ゆっくり読みなおしてみようと楽しみにしています。その時には又今とは違った感慨を与えてくれることでしょう。

今日も今日とて、幼な子となつて、黄昏迫る太平洋戦争前の上海の街でいつまでも遊んでいると、突然、現実の私に引き戻す容赦のない声がしました。

「お母さん！ 晩御飯まだア」

内芝登志代

和歌山市

押入れの隅にきれいな色彩の紙函がいくつか積み重ねているのが私の宝物です。

年賀状、手紙と表示しています。年賀状はこの家に移ってから十数年、年毎に明記して大切に保管しています。

手紙は柳友の皆様からの温かいお心や励ましのお言葉、また嫁や嫁がせた娘からは孫の成長ぶり、幼友達からのなつかしい便り等、もらった日を明記して一カ年間状差しに挿して年末に一日がかりで読み返しながら整理をします。手紙は二、三十年前の赤茶けたものでもいつまでも大事に置いています。

今は健康に恵まれて皆様に各地へ連れて頂きますが、それが出来なくなった時、皆様のお顔を思い浮かべながら一字一句を読みかえしなつかしく追憶したいと思っています。

私の歩んで来た歴史でもあり宝物にしています。

政岡日枝子

米子市

あなたの宝物とは聞かれたら、私は即座にそれは子供ですと答えます。一人しか産むことの出来なかつた娘を神から預れる宝物と思ひ、大切に大切に育てております。しかし、それも私が宝物として独占しておれるのもあと僅かでしょう。いずれは私から翔びたつていく事でしょうから、その他にも宝物らしき物は幾つか有りますが、川柳の道を歩もうとしている今では、宝物はつぎのこれ一つです。

それは著人賞という何にも勝る心の宝物です。鳥取県の川柳会育ての親、故森田著人先生の遺徳をしのんで作られた地方紙柳壇の年度賞ですが、第二回目を私が頂いたのです。

亡くなられる前、病院へお見舞に伺い、闘病のやつれもかえりみず、私ごととき若輩に一心になつて川柳の話を、諸々の話をして下さり、そういう見舞が何回か、先生終りの日迄続きました。その先生ののお名を頂いた賞です故、有難く宝物にさせて頂いております。

有田とし江

鳥取市

このテーマで御依頼を受け、いざ考えてみると、これといつて心に残る宝物など仲々あるようでないものだ。

一寸落とせばすぐに壊れてそれぎりになつてしまふ、そんな宝物ではつまらない。投げても蹴つても永遠に壊れることなく、一生涯胸の奥深く抱き続けていたい、そんな宝物であつて欲しい。

私が今一番大切にしている宝物、それは三十余年、喜怒哀楽を共に長い人生行路の旅路への様々なロマンの花を咲かせ、今日まで歩いてきた、二度と得がたい夫婦の愛の歴史こそ、今の私へ残された最大の宝物としたい。

そして朝夕仏壇に掌を合わせる私へ、今日は何をしようとしている、しっかりとするんだと無言で優しく問いかけてくれる、そんな柔和な笑顔の亡夫の遺影が何ともしとおしくてならない。

六十の坂を登りはじめた一人の弱い女の生きてゆく道しるべをしつかり支え励まし、今なお、私の心に明るい灯を燈しつづけて温かく見守ってくれる、そんな亡夫の優しい愛の宝、そしてこれからの私の人生を共に歩いてくれるもう一つの宝物、川柳がありました。

清水白柳 句碑建立

菊活けてひととき欲を忘れたり

白柳

趣意書

清水白柳氏が昭和四十六年逝去されて早くも十二年目を迎えました。

ご承知のように白柳氏は大正十三年川柳雑誌創刊号から誌友であり、昭和十五年不朽洞会員となり、常任理事を勤められ、昭和四十年川柳塔に改題続刊にあたっては編集長として多大の貢献をされました。

このたび白柳氏のご長男清水健司氏のご同意を得て、故人の遺徳を偲ぶ柳友相謀り句碑建立を決議いたしました。

つきましては句碑建立基金の一助として皆様方のご賛同、ご協力を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

記

句碑建立基金

一金壹千円也(お一人一口)

昭和57年2月吉日

句碑建立委員長

菊 沢 小松園

▼事務局及び会計

高杉鬼遊方(申込書送付、ご送金の場合必ず「句碑建立」と明記して下さい)

〒581八尾市中田二丁目302

◇除幕式

句碑建立場所 阿部野神社境内

大阪市阿倍野区北畠3丁目

句碑除幕式 昭和57年9月26日(日)

午前11時

◇記念句会

日時 昭和57年9月26日(日)午後1時

場所 阿部野神社 北畠殿

大阪市阿倍野区北畠3丁目7-20

祝辞 兼題
「菊」 中島生々庵
「職人」 八木千代選
「雑草」 定金冬二選
「先祖」 山内静水選
「板」 森中恵美子選
「仁王」 中尾藻介選
「仁王」 西尾栗選

席題 二題(橘高薫風・岩本雀踊子)

(投句拝辞)

会費 一千円(記念品・句会報贈呈)
懇親宴 三千円(同会場にて)

清水白柳句碑建立

実行委員会メンバー

顧問

中島生々庵
川村好郎
伊藤茶仏

委員長 菊沢小松園
副委員長

岩本雀踊子
正本水客
阿部柳太
西田柳宏子
金井文秋
高橋操子

委員

児島与呂志
香川酔々
高杉鬼遊
河内天笑
板尾岳人
那須鎮彦
谷垣史好
清水健司

愛染帖

橘高薫風選

花言葉花に教えて慈しむ
釜で炊くめしは戦を好まぬ
いのちあるものの如くに雪は舞い
雪年三人寄って熱い燭
雪年三人寄って熱い燭
そむかれた掌から卵の黄身が散る
有事論脳裏にいつもきのこ雲
女房が支う脚立に立ち上る
筆持ってはまだ直線すら書けず
すぐ消える宴のなかの人形たち
日曆もなにかを待っている春
水の流れに花びら流すひとを流す
菜の花の中でつまはじきにされる
三分粥五分粥それから人恋し
おろおろと男償うもの持たず

机上論なんきん豆を空にして
もしかして耐えているのは鼻の先
許せない人も見ているテレビ消す
金策の足が銀杏を踏み砕く
ふり出しの兎に亀は氣を遣い
唄好きな父一合でネブ力節
地獄見た男の果ての昼の酒
下戸が酔う余程嬉しことらしい
外国の海横文字で波しやべり
福祉切り捨て姥捨山がそこに見え
誘うたが払う婁で暖簾出る
なせば成る努力を夫婦から学ぶ
あかぎれの手をものともせずかるた取り
水仙のように香っていたい年
盛り場の別れは涙すぐかわき
小さい宝石指に亡母との愛つなく
紅白の饅頭白が残つてる
相談に行けば電話と違つ声
歩道橋なかつた頃は若かりし
ひかえめな男にすこい過去を聞く

大阪市 小出 智子
大和市 津山 刀水
兵庫県 奥野 テル
今治市 矢野 佳雲
今治市 越智 一水
鳥取市 河村 日満
豊中市 満仲 きく子
青戸 田鶴
唐津市 仁部 四郎
羽曳野市 麻野 幽玄
岡山県 池田 半仙
今治市 八塚 三五島
倉敷市 水粉 千翁
富田林市 藤田 泰子
大阪府 山根 いつを
伊丹市 榎谷 寿馬
西宮市 林 はつ絵
富田林市 林 澄子
高槻市 田崎 あき子
岡山県 稲岡 正之
尾鷲市 渡辺 伊津志
大阪市 神夏磯 道子
寝屋川市 柴田 英壬子
高知県 赤川 菊野
唐津市 浜本 久仁於

民謡も土を落した歌になり

岡山県 松本元江

四十八歳鼻の利かない戊である

今治市 月原宵明

サラ金に信心をする神があり

富田林市 中村優

手品師のシルクハットの礼佻し

岡山県 嘉数兆代賀

言い勝って枕の高さから冷える

米子市 菅井とも子

もう少し生きたく道を遠廻り

和歌山市 福本英子

スナツプの嘘と本当を焼き分ける

青森県 岩淵一星

カラオケをテストしてみる妻の留守

大阪市 川口弘生

父に似た罪は母には許される

島根県 岩田三和

叱られて食べた遊んだ優良児

米子市 桑原伊都

お馴染の顔が出て来る露路の朝

守口市 野呂右近

病葉の落ちしは告げず看護する

吹田市 西岡豊

正月の酒光つて燃えている

笠岡市 木山遠二

ともかくも笑って居ればよい八十路

島根県 小砂白汀

野が山が白内障を病む黄砂

松山市 谷真風

幸せがあつた手毬の見える椅子

鳥取県 清水一保

我が家にも小さな女太閤記

島根県 木村はじめ

リベートが鼓膜に響くバイオリン

唐津市 岩崎実

工事工事川と線路にはさまれて

島根県 堀江正朗

いくら寝て起きても僕の目は見えぬ

島根県 堀江芳子

同病の友もすこやか約す春

鳥取市 両川洋々

許して帰る辻でまあるい風に出会う

松原市 佐藤藤子

哀しみに仁王の顔が激しすぎ

和泉市 岡井やすお

新しい首輪犬へのお年玉

堺市 大道美乙女

金盃に悲しい酒はまだ浮かぬ

吹田市 西川景子

目移りがして出直した松屋町

倉吉市 奥谷弘朗

足音で機嫌のわかる妻がいる

米子市 小西雄々

漫才の風刺に庶民として拍手

兵庫県 森脇和子

三ヶ日温もり分つ灯と遊ぶ

大阪市 藤森小雅子

巧言令色尾をふる犬へ椅子が空き

笠岡市 高木桃里

胎動をたしかめ日記へ手を戻し

富山市 舟渡杏花

合鍵の鈴の鳴らない日が続く

唐津市 新岡回天子

手腕なくお世辞のうまい平社員

唐津市 桑原掬治

現実と夢との距離の五十年

和歌山市 若宮武雄

にせ札へもし利益があつたなら

東大阪市 三宅哲夫

似て非なる繁栄お国火の車

鳥取県 羽津川公乃

ほかほかの石焼芋とバスを待つ

和泉市 西岡洛醉

ちぎれ雲頭上にだべる平和論

大阪市 朝倉利義

年金の範囲で酔つた同窓会

堺市 高橋千乃子

母きらう方角小さな恋進む

貝塚市 行天千代

お正月鯛焼き買ってめでたがり

岡山市 井上柳五郎

いい正月だったと酒のことに触れ

島根県 西村早苗

三度目も舞台で撮す京の旅

高知県 山下登舟

小春日や道路奉仕の長寿会

東大阪市 市場没食子

パトロンと突つぱり合つて年を越し

青森県 五十嵐操史

一息を入れるつもり目の目を瞑る

岡山市 浜野奇童

反抗の血で立ち父へ口こもり

急用の電話をしらすオルゴール
浜田市 中川 幸一

失礼な言葉も胸で温める
堺市 久井 富子

まだ妬いてくれる妻ありあごを撫で
岡山市 原田 凡太郎

冬に咲く花は孤独の匂いする
岸和田市 古野 ひで

誓詞読む娘に父が敗けた時
浜田市 佐々木 裕

方程式は解けぬ小商人よく儲け
八尾市 松下 蕉露

死ぬ人とした約束を守つてるか
札幌市 北村 深星

きりりつと帯に隙なし好い女
米子市 野坂 なみ

深い溝あるから遠いまわり道
米子市 雑賀 美代

節分に追われた鬼が春を呼ぶ
米子市 林 瑞枝

地蔵尊ビルの谷間で世を悟り
唐津市 浜本 義美

晴着みせにゆくだけでよし初詣
河内長野市 井上 喜醉

平和では暮らせぬ地球の表裏
京都市 松川 杜的

妻と飲むから一合の酒に酔い
大阪市 西森 花村

乾漆の仏像小指をつめたのも
京都市 山本 規不風

来年の約束さりげなく古稀よ
和歌山市 浦野 和子

恵方撰の女の暦暮れやすき
唐津市 田口 虹汀

三分の一は布団の中で生き
京都市 都倉 求芽

辞書引いてやっぱり今の字にしとく
奈良市 森田 カズエ

甘党も辛党もいて弾む箸
今治市 薦本 昌道

真実へ坐り直して詫言を言い
大阪市 中野 忠広

葬式で出合い年賀のご挨拶
高知県 曾我部 つきお

倒産の後を引きつぐよその杜旗
堺市 田辺 哲寿

背を丸めたら冬がよけいに寒くなる
高知市 北川 竹萌

飼主を信じる犬の目が丸い
唐津市 久保 正敏

テレパシー不吉なことは良く当る
大阪市 松浦 俊子

記念切手一番好きな友に貼る
米子市 寺沢 みと里

春の句も添えて賀状の来るゆとり
岸和田市 清野 こう

孫の目を集めて荷物の紐を解く
東大阪市 竹中 綾珠

風の舞う大空青く青く澄み
岡山県 岩道 博友

二次会の席から本性覗かせる

暖く迎える嫁の椅子も買っ
米子市 田中 亜弥

煩惱を汲んではそそく除夜の鐘
今治市 新居田 胡頼子

よくできた賀状のいぬは抜いておく
羽咋市 三宅 ろ亭

子に野望託せばきつぱり断られ
仙台市 川村 映輝

しつけ糸抜いた春着に夢を盛る
西宮市 妹尾 春江

お見舞の言葉に困り行きそびれ
岸和田市 原 さよ子

だめ男ある日謀反のアデランス
大阪市 白石 潔

投句先 千560 ★ 豊中市中桜塚三丁目13-15
橘高薫風(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「税金」選者 橘高薫風

締切 3月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市東区馬場町6-4 NHK
大阪放送局「老後をたのしく」係

発表

3月27日(土)ラジオ第一放送
午前9時15分から

特集「後進にのぞむ」を読んで

直 原 七面山

東野大八氏は「これからの川柳」の中で、ボオの言葉「詩は短きをもつてよしとする」を引用され、氏ご自身の川柳人に対する願望を次のように述べておられます。(推察)

「この言葉の持つ真実をよく理解して既存の川柳が持っているものもろもろの制約や柵から一日も早く脱却し、自己の思念を思い切り短い詩型(言葉)の中に封じ込め、しかもなお詩情豊かで興味溢れる作品をものしつ『詩の世界』で末長く生き伸びて行つて欲しい」と。

ボオの言葉を読んで私は「我が意を得たり」と欣喜雀躍思わず膝をぽんと叩きました。

そして正に消えんとしていた五五の句、四四の句に対するあの私の情熱が、胸中に再び蘇って来るのを覚えました。

私は昔、川端康成の小説「山の音」が映画化されたのを観て、男には美しすぎた妻の愛、と言う句を作ったことがあります。この句は

故路郎師の選を経て川雑の二十九年四月号に発表されました。

この事は私に「ドラマは句になり」「句はドラマを含んでいなければならない」と言うことをはっきりと教えてくれました。

そして、あの長いドラマも、五七五の一句に縮めることが出来るのだから、五七五の川柳ももつと縮めることはいづつめていた時全く偶然に、師の「二階を降りて何処へ行く身ぞ」夫婦別あり影と影の名句七七の句と七五の句が目飛び込んで参りました。私はこの二句を度々読んでいた中に、この句の持っている姿と内容の美しさに惚れこみ魅了されて七七、七五の句を数多く発表し続けて参りました。

その中に若しこの七五の句をなお一層縮め得たらと盛んに思うようになり、遂に五十二年の四月頃から実作に取り組みました。

ところが、こうした私にとって誠に辛いことには、ボオの言葉ではございませんが、句は短きをもつてよしとする」と言うことに

大きな関心を理解を持っていた下さる中島生々庵、若本多久志、西尾栗という斯界の大先輩、大通者

に恵まれていたことでございました。

五五の句「利口程黙つて居」が「川柳塔」の五十三年一月号で、四四の句「拗ねてた娘が媚び」が五月号で発表され、以来句数も既に八十余を数えております。

が、まだ勉強不足、研究不足、力不足で、唸って頂けるような名句を世に問うまでには至っておりません。

が、私は大八氏の御主張、御意見、御要望に賛同し、応える川柳家も生まれて来、氏の望まれるような立派な作品が日本の川柳誌上を飾る日ももう間近ではないかと思っております。

新 同 人 紹 介

佐

野

白

水

吐米・酔々・与呂志・敏推薦

稲

葉

冬

葉

水客・柳宏子・薫風・栗推薦

(好子改め)

天気“正朗”なり祝賀句会

57年1月24日・出雲市民会館

橋 高 薫 風



お孫さんから花束を受けるご夫妻

堀江正朗・芳子句集「二人三脚」の出版記念の会は一月二十四日（日）出雲市民会館で開催された。山陰地方稀に見る晴天で天も二人に祝福を惜しまぬ様子。参加者百二十数名の抜句に聞き入る殊に正朗氏の顔は歓びに溢れていて「天気正朗」と言いたい一日であった。

た。国際会議でも聞くような豪華な会場、出版記念の上に、堀江芳子さんの昭和五十六年度いずも賞受賞のおめでたが重なり、華やかなムードは句会後の懇親宴にまで続いた。▽いずも賞受賞作品

久しぶり年のまるみに会うてくる 芳子

大阪からの参加者は、西尾栗・野村太茂津岩本雀踊子・高杉鬼遊・飯田悦郎・内芝登志代・浦野和子・藤村メ女・本間満津子・神夏磯道子・山田喜代子・妹尾春江・林はつ絵・笠原吸江・児島与呂志・山本規不風・黒川紫香・清水健司・稲葉好子・橋高薫風の諸氏。

席題 正 尼 緑之助選

子を叱る正座へしかと両手置く 早苗
正直をほめられ運のない男 正朗
子はちゃんと正しい方へ旗をあげ 芳正
正直なカメラ年齢まで写し 喜代子

顔ぶれを見て正論も色を変え
デモクラシー正義の消えた多数決
時刻表通り別れの笛が鳴る
(人)若い血がつっぱり過ぎた正義感
(地)正しいと思った道が曲り出す
(天)悲しからずや正直者のちびた靴
(輪)正眼に構えて洩らすお念仏

兼題 堀 藤井 明朗選

外堀の深さを寡婦として生きる
天守閣昔が残る堀の舟
落城の悲劇見ていた堀が澄む
メタンガスぶつぷつ堀のひとり言
伴せな鯉が皇居の堀に住み
この堀を今も忍者が渡りそう
千鳥城歴史を語る堀の苔
(人)みんな辛いドラマを抱いて堀の橋
(地)堀端に佇てばヘルンに出会いそう
(天)堀の水歴史をためて沈黙す
(輪)堀端に八雲をしのぶ城下町

兼題 手 小林孤呂三選

もう熟年うつちやりという手を使い 与根一
手さぐりの絵筆自問自答する 瑞枝
さりげなく別れた人の手の温み 千春
仏の手こんなになやさいのが慈悲か 薫風
妻や子を守る手旗は強く振る きみえ
戦争を阻止する両手なら貸そ 日満

着せたくて針の手はずむ夜の音

極道の子の手に重い父の骨

(特)風になる女の両手が冬を抱く

(軸)中年の手にもつ花の色探す

兼題 開く

本庄

快哉選

暖かい風ためらわず開く花

旗と人ゆれて開門待つ皇居

気にそまぬ客もあろうに自動ドア

アルバムを開けば竹槍持った妻

寒椿心開いた日の座禪

確証が口を開かず被告席

咳一つしてから開けるエチケツト

鏡開きコトコト小豆煮えている

弁当を開くと牛が寄る牧場

人形が眼を開いてる闇のなか

(軸)アルバムを開けば落ちるものがあり

兼題 情熱

津川

紫吻選

情熱の直球脇見などしない

カルメンのバラに男は熱くなる

情熱に負けて男の貌捨てて

情熱をこめた折鶴何故飛ばぬ

情熱のバラの刺ならさされよう

湯たんぽのような情熱かも知れず

情熱の詩恋に生き恋に死に

情熱の血書南の空に散る

情熱の作家放浪の旅をゆく

(秀)情熱へアダムとイブが駆け廻る

(軸)情熱の捨て場に男うずくまる

兼題 タイミング

河村 日満選

タイミング同居と決める孫が出来

逃げ道も決めて合わせるタイミング

ゴキブリもこっちの出方待つ姿

タイミングずれて切り札に残り

タイミング合わせる捻子を秘書が巻く

立ち聞きをしていたようなタイミング

重役の椅子が空いてたタイミング

(人)印捺すと酒が出て来るタイミング

(地)恋人の見ている前でホームラン

(天)神様もびっくりされたタイミング

(軸)晩酌の父を落としたタイミング

雄々

兼題 二人

西尾 葉選

アベックで来いとはうれしい子の便り

たまさかの二人へ姑すぐ帰る

影法師うらぎることもない二人

風の夜も阿吽で灯す二人坂

妥協妥協 我慢我慢で来た二人

二人だけ心の通う糸電話

師弟二人静かに語る分教場

(人)二人連傘のしずくは気にならぬ

(地)雪の音二人が同じこと話す

(天)一对で揃って坐るめでたい日

(軸)二人三脚ふみ出す一歩春の風

(尼 緑之助報)

快哉

れいじ

鬼遊

緑之助

太茂津

正江

正子

辰子

規不風

叮紅

川柳塔社常任理事会 (2月1日)

(出席者) 栗・薫風・紫香・水客・潮花・与

呂志・史好・鬼遊・柳宏子・酔々

▽議事並に議決事項

1、川柳塔選者4月号より多久志選、水煙抄

選者4月号より紫香選となる。

2、今年度各地柳壇賞は与呂志選とする。

3、5月23日ふあすと社紋太忌大会選者に、

鬼遊派遣

とする。

5、二百号記念大会の職務分担を決定。

6、直原玉青、東野大八両氏へ感謝状贈呈の

件決定、主幹の意見をいただく。

7、大会参加者に進呈する記念品に関する件

を確認。

8、新同人には本社承認書を授与し、同人バ

ツジを支給する。

9、本社旗を新しく作成する。

(記録・酔々)

3月の常任理事会は1日(月)

手腕

梅谿庵 不酔 選

女性には特殊な手腕を持つ男
見込まれた手腕未だに時を得ず
前歴の手腕覽われて看視員
汚職事件非凡の腕が罪招く
自他ともに認めた手腕陽の目見ず
男性に負けぬ手腕で嫁さおくれ
勲章もないその人にその手腕
腕前を賞めて師匠は秘を授け
口先の手腕家すぐに底を見せ
テレビ屋が来れば造作もない故障
利れすぎた腕が己れの穴を掘り
切れすぎる手腕が敵をまた作り
手腕発揮裏に多額の工作費
大将の器手腕は借りて来る
栄転へ手腕の数々あげて書き
弟子の腕認める愛の鞭が鳴り
札束と手腕手秤にかけられる
酒くせは承知手腕を先ず買われ
ホステスの手腕病気の親でつり
むつつがみせる手腕の手の早さ
あいつなら手腕は十分組閣前
惚れ込んだ手腕に社まで乗つとられ

特別な手腕もなくして生字引
手腕家も神に頼るか初詣 忠 夫
手腕家に若手意識のない職場 代仕男
無名の娘みるみるスターにする手腕 景子
愛弟子の手腕へのれん染めあがる みどり
のれん継ぐだけの手腕で三代目 茶人
手腕家の妻の音頭で夫舞う みつる
引抜いた手腕の社員また抜かれ 大柏
手腕では負けぬが容姿チト劣り 正敏
手腕ある噂の男家庭不和 富子
佳
手腕家も家に帰れば甘い父 婦美子

石 仏

清野 こう 選

雑音も途絶え石仏月といる 紫浪
前垂れの数に差のある石仏群 三五島
短気はあかん石仏に教えられ 重人
石仏おだんご犬に取られる みる
石仏に問いつめられそう今日の顔 芳枝
願い事水掛け不動の苔にしみ 景子
山削る文化に石仏観念す 軒太楼
石仏の遍路の歩幅止めた悲話 茶人
真四角の土地をまあるくする手腕 道子
魔線をまたも白紙にした手腕 本蔭棒
敵だます手腕に味方までだまし 洋々
巢作りの鳥の手腕に教えられ どんたく
人
手腕家に惜しい酒癖女癖 曉明
地
手腕家も大きな傷となる短気 木魚
天
辻つまを合わす手腕は別に持ち 弘朗
軸
なびかせる手腕特異の知恵を持ち
淋しかろ石仏洞の奥に座し 勝一
交通事故現場のちいさな石仏 素身郎
商魂が水子地蔵を盛り立てる 正敏
石仏の笑顔見に行く大山寺 弘朗
バス客へあくび殺した磨崖仏 浪速子
石仏道しるべにも利用され 春草
開発をじつと見守る石仏 豊
見聞を話してみたい石仏 芳水
目標にされる路傍の石仏 つきお
石仏を開き野菊が乱れ咲く 登美也
石仏さけ国道は急カーブ 三吉
石仏旧街道に放つとかれ 凡太郎
事故多発此処にも出た石仏 悠泉
よだれ掛け替え石仏初春の貌 悠泉
石仏無縁の人と思われず 昌道

夜もすがら響く石工の彫る仏
鼻欠けも耳欠けもいて羅漢さま
ランドセル石の仏に番をさせ
石仏に囁きかけた旅の女
どの顔も亡妻によく似る石仏
深山のこんな小径に石仏
石仏も貰い泣きする願ひ事
ロケ隊へ辻切りの出る石仏
母悲し水子地蔵に罪を詫び
僕にだけ何かささやく石仏
銀山の哀史を語る石仏
石仏暮れて灯が欲しくなり
石仏さんから雪が解けはじめ
石仏区画整理が行きづまり
ほほ笑めばほほ笑みかける石仏

虹江
久仁於
明水
七面山
早苗
本蔭棒
ひで

佳

石仏円座に入れて野良は登
石仏へカラスは馴れた羽休め
石仏村の歴史と共に立つ
職人も石仏かな今日も彫り
半眼に水子の唄を聞く地蔵
ぬかずけば石仏亡父と亡母に似る

日枝子
芳子
水煙
雅風
大柏
洋々

地

石仏の頭とんばも蝶も来い
酒注げば一升はいく石仏
水子地蔵へ罪の意識の手を合す

天明
可住

父

横地雅風選

靖国で臉にだけの父と逢い
こまでは父に従う線を引き
青写真父の書斎はけずられる
ある日ふと父の頑固を俺に見る
めつたには叱らぬ父で身にしみる
敬老日父に補聴器買うて来る
給料の多寡で父親評価され
わらんじを作る父から血が染みる
出稼ぎの皺を増やして父帰る
すみません一言だけを父が待つ
亡き父が残した職に今日も生き
女系家族父も一しよにみかんむく
定年の日まで光った父の靴
勘当を許す瞳で父も老い
甘えたら弱い父だと知っている
亡き父の癖そのままに兄老いて
片減りの靴父の座を負うて出る
父の日に父はゆっくり寝ると言っ
父と子の絆としての電話線
酒やめた父のさびしいうしろ影
坐るとこ坐って父にある威厳

久仁於
ひで
静子
深里
満津子
春日
義美
村風子
与根一
芳水
炬青
可住
三吉
和子
茶人
一路
倫子
どんたく
はじめ
幸一
登美也
勝美

佳

父と子が酌む盃に母が酔い
腕広げ父は失意の子を迎えろ
父なればこそその矢面に立つてくれ
何かある肩を落して父帰る
本当の涙は父が拭いてくれ
戦死した父の最後を聞き歩き
亡父の愛判って墓に詫びにゆく
戦死した父の形身は私の名
熟年の父は骨身をまだ削り

満津子
秀峰
里風
博友
峰雪
規不風
景子

地

天

あの時のあの一言は父のもの
人の善い父の判には泣かされる
父の忌に父の地下足袋干したまま
まだ生きてほしい米寿の父囲み
食へるだけそれでも父は投げ出さぬ
曲り角劇しい父の平手打ち
老いて子に従う父は無口なり
定年のドラマ見ている父静か
長靴をあしたに向けて父は脱ぐ
父のない児に肩車せがまれる
良縁へ父なんとなく逆らいて
雨霞誰より先に父に降る
父の遺書もつとも痛いところ記し
父と言う言葉を知らず父となり

四郎
木魚
大柏
テル
美恵
道子
星斗
弘朗

初歩教室

題 — 図星 —

本田恵二朗

川柳からユーモア味が消えてしまったという声を聞くこと久しいが、川柳人たちがユーモア川柳を嫌って作句しなくなったのことは私は思わない。川柳の幅が広くなり、また深くなつて、ユーモア味が薄くなつただけのことだと私は思っている。短文芸でユーモア味を描写できるのは川柳だけであることを忘れてゐるのはさびしい。ユーモアは人生行路の潤滑油である。近隣との和、仲間の和、家庭の和など和の源泉となつてくれる。ユーモアやジョークの功德を川柳人は見直して欲しい。ユーモアを発見出来る川柳人は沢山存在していると私は信じている。それら作家のカムバックを希つて止まない私である。

図星だと大笑いしてごまかして
(図星つかれて大笑いでてれかくし)
図星さすのがはずれた乱れ髪
(乱れ髪はずれた図星持て余し)
ふみ
古都路

ホステスに図星指された下須な客
(ホステスに図星指されて酔いがさめ)
図星指す良い政治家は隅へ追い
(図星指す良い政治家はけむがられ)
口数が図星さされて変になり
(図星つかれて舌の動きがにぶり)
じわじわと図星を的に攻めてくる
(図星じわじわと真綿でしめられる)
図星つく減点ババの泣きどころ
図星きて慌てつこうう嘘一つ
(嘘一つ図星つかれた慌てよう)
言い当てて秘密の恋をあわてさせ
(レポーターかくした恋の図星つく)
よく当る噂の易がちと怖い
(図星つく易者の顔がちと怖い)
これだけは図星ゆずれぬ赤字線
大穴を図星ねらつた志望校
(狭き門の図星衝きたい策を練る)
おさな子に図星指されて口こもり
銭形は流石図星外さない
(流石なり銭形平次図星衝く)
将を射るつもりを馬に見抜かれる
図星だった証拠に耳が赤くなる
(図星だった証拠耳たぶまっかっか)
デートの日図星指される嬉しい仲
(友の目がデートでしように図星さす)
照れさせる可愛い図星で笑いの輪
(憎めない図星に巻かれ照れている)
八卦見が図星をついた過去のこと
勝美

(八卦見に図星つかれて過去がてれ)
図星から少くなつた言葉数
(お喋りが図星つかれてどもり出し)
何気ない図星に胸をえぐられる
図星さすしおどき待つて気がまえる
(図星指す汐時さすがあやまたず)
図星指す磁石が欲しい日の焦り
忠実な犬の尻尾に図星教えられ
(忠犬の尻尾に図星教えられ)
ハイミスの図星課長のミスを突き
(ハイミスの図星課長のミスの図星突き)
図星冴えてやはり見直す年の功
(年の功さすがに図星はすさない)
心配が図星になつていたカルテ
信じたくない占いがよく当り
(信じたくない占いが図星つく)
おとほけの顔で図星を逃けている
お化粧の下が図星で赤くなり
(お化粧の下の図星を見透かされ)
図星されあわてて仕舞う嘘一つ
(嘘の皮図星突かれてバンクする)
無口から出た一言に図星され
(無口から出た一言が図星つき)
週刊誌図星のように書きたてる
背に受ける噂に図星つき指され
(背に受ける噂が図星突いてくる)
図星指す一と言痛く身をせめる
図星かなほんのり顔を染めている
(図星の矢ほんのり頬を染めさせる)
同
三千代
同
美智子
同
保夫
同
幸子
同
義美
同
佐代子
同
雅水
同
元江

図星から覚めて明日を考える

山九

見抜かれた友の忠告ある図星

同

(見抜かれた図星へ忠言あたたい)

偉いのか阿呆か図星を刺してくる

三五島

すばりと図星つかれて行き詰り

同

(ともに図星を衝かれて行き詰り)

頭かきかき図星へ恐れ入り

兼治郎

母すばり吐てびっくりする図星

同

(母なればこそすばりと図星を衝く)

貧びたり易に自尊を盗まれる

深星

☆わたしの宝物(追加)

安藤 寿美子

川柳の宝物は何といっても五十年度に頂いた川柳塔賞の桶ですが、近頃の不勉強を恥じて本棚の上にしまいこんであります。それから古方川柳かるた、先生が先の胃の手術直前のお正月にあり合せのボール紙に手描きされたものです。見てみると先生の温顔が浮んでまいります。小さい頃母がとても美しい刺繍の半衿を持っていました。私はその色あざやか

教師の眼確かであった子の出世

同

(師の眼力狂わず教えず子出世する)

図星つき頭冷せと左遷する

芳水

図星です仲人役を頼む仕儀

同

(図星です仲人役を頼みます)

つべこべが図星指されて恐れ入り

凡太郎

図星指されて良心が目覚し

同

欠伸してまた麻雀と見破られ

昭治

アツ図星とたんに頼つて赤くなり

同

的中の図星それでも白を切り

同

な刺繍を鉄で切りぬきガラス瓶に入れ庭の隅に埋めました。そして時々土をはら

つて眺めることにしました。結果母がど

んなに怒ったか私がどんな目に遇ったか

はご想像にまかせます。

しまいこんであたりに人気なき頃ひと

り眺めて涎をたらしているのも宝物でし

ようが、それによって励まされ、初心に

かえり、成長への足がかりとなるものこ

そ宝物と申せましょう。

私の宝物も持ちくされにならぬようカ

ビがはえぬよう勉強したいと思っており

ます。

(図星の中まだ白を切るつもり)

甘い声図星指されて背をむける

貞子

言いかねている娘へそつと紙包み

図星ではないがいい線行っている

瓢太

手口から見えてあいつだと手配され

同

(手口から見えてあいつだと刑事の目)

永年の勘忽ちに図星指す

同

(たちまちに図星つき刺す年期の勘)

振り出しへ推理戻して図星衝き

小雅子

さりげなく図星をそらすお茶を入れ

同

易の灯が図星まともに衝いてくる

同

山かけた試験図星でほくそ笑み

英子

がむしやらに生きて図星を見失い

同

天真爛漫に図星を指した眼がきれい

同

(図星指すつぶらなお目目澄んでいる)

首たてに女の海にある図星

寿子

不意をつく図星へ電流走り出す

同

図星射る銃口むねに避けられず

同

(図星射る銃口逃げる術もなく)

顔色が図星でしたと言っている

公乃

母さんの図星子供は不思議がり

同

お美事な図星へネタが割れちまい

同

かくしても図星と顔に書いてある

利美

先生に図星さされたる休み

同

図星だと思ひ込んだが早合点

同

題「果れる」3月20日締切(5月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一九一三四

千七一 本田恵二朗

柳界展望

(原稿締切毎月末)

集録・香川醉々

所・川柳塔社

■津山市芸術祭第四回津山川柳大会が、次の要領で開催される。

とき・57年6月6日(日)

午前10時30分開場・12時30分兼題締切(2句吐)

ところ・津山市大手町5の3美作教育会館大ホール

兼題と選者

・「たたかい」

田辺青山

・「カード」

石部 明

・「遊ぶ」

酒谷愛郷

・「彩」

木野由紀子

・「道」

長町一咲

・「紙」

香川醉々

・「洗う」

坂根寛哉

・「人生」

岩井三窓

・「珈琲」

墨作一郎

・「父」

定金冬二

紋土賞として、次の作品を

選出された。作者は、在ニ

ューヨーク橋本ゆき氏

胸に灯をつけ旅立った白い

船

■岐阜川柳社川柳大会並に市川鱈魚句集「土」発刊記

念

日時 3月22日(祭) 10時

会場 岐阜商工会議所(大

ホール) 国鉄・名鉄駅から

徒歩15分、電車バス柳

ヶ瀬下車

兼題 各題2句

酒

田中 明二

独身

杉山 方夫

大根

青木 史呂

ニユース

曾根 幸広

授賞

神田仙之助

大

森 紫苑莊

土

市川 鱈魚

事前投句(3月10日締切)

はめる 野口 初枝

社 告

川柳塔賞選考委員に

西 田 柳宏子

次回中間発表より黒川
紫香氏と交代致します

一八・田中明二

岐阜川柳「川柳大会係」

■第5回鳥取県川柳大会

日時 57年3月28日(日) 9時

会場 境港市湊町境公民館

お話 津川紫吻氏

兼題と選者

・「反省」

・「狙う」

・「いのち」

・「かけひき」

・「真中」

・「裏」

席題二題(2句吐)

会費 千六百円

主催 鳥取県川柳作家協会

なお欠席投句の方は、七

百円を添え、三月十日まで

提出のこと。投句先

〒684境港市元町一五八

3 山田蟬々宛

▽同人・柳友消息△

▼左記の方々から、近況のお便り拝受、有難うございました。羽原静歩・竹中綾

日本川柳秀句集刊行要領

- ・現代川柳をあまねく公募、15名の選者により共選、秀句100句、準秀句200句、佳句参加者各1句、日川協作家賞作品を掲載、A 5又はB 6版の上製本とする。
- ・対象句は応募した昭和56年7月以降の作品とし既発表、未発表を問わない。
- ・選者は3名一組の5ブロックとして、出句者は希望の選者ブロックを指定する。

- 1 ブロック 藤島茶六・野村圭佑・渡辺蓮夫
 2 ブロック 越郷黙朗・大野風柳・菅原一字
 3 ブロック 岸本吟一・時実新子・寺尾俊平
 4 ブロック 橘高薫風・田中好啓・森中恵美子
 5 ブロック 山田良行・西尾 栞・増井不二也

- ・日川協作家賞表彰

- 1 応募作品(5句)を審査の対象として5名を表彰

- 2 日川協作家賞選考委員

藤島茶六・山田良行・岸本吟一・
 白倉寿夫・永田帆船・広瀬反省

- ・参加料 1部 3,000円(秀句集代金)
 何部でも参加できるが、同一句は不可、1部毎に参加料添付
- ・参加句送付先

〒556 大阪市浪速区敷津西2丁目6-15

日本川柳協会事業部

電話 (06) 649-1731
 振替口座 大阪302999

参加用紙は日川協本部へ請求のこと

珠・傍島静馬・土岐トク子
 ・山内静水・藤後実男・西村美佐女・榊原秀子・宮尾あいき・浦野和子・内芝登志代・藤井明朗・藤井春日・川口弘生諸氏。

▼神谷凡九郎氏(大阪市) 母堂トキハ様1月26日心不全のため長逝。28日告別式が行われた。享年83歳。
 ▽句会案内
 ■菜の花句会
 時・3月10日(水) 6時
 場所・西郷会館(八尾神社境内) 近鉄八尾駅下車
 兼題Ⅱ 駅(西尾 栞) 酔う

(香川酔々) はがき、チャンス、大阪風景。
 ■南海川柳部
 時・3月18日(木) 夕6時
 場所・南海会館ビル本社地下食堂
 兼題Ⅱ 教科書、けたはずれあべこべ。
 ■南大阪川柳会
 時・3月19日(金) 夕6時

場所・寺田町高松会館(環状線寺田町駅下車)
 兼題Ⅱ 差、思案、すがる、先輩。
 ■駒つなぎ川柳会
 時・3月22日(月) 夕6時
 場所・寺田町高松会館
 兼題Ⅱ 耐える。腕前、根性焼く。
 ■東大阪川柳同好会

時・3月27日(土) 夕6時
 場所・東大阪中央公民館
 兼題Ⅱ ロック、クラス、にんにく。
 ■堺川柳会
 時・3月16日(火) 夕6時
 場所・堺青少年センター(阪線線線の町下車)
 兼題Ⅱ 卒業、棚おろし、マイコン、買い替え。
 ■「歴史の散歩道」吟行会
 は、すでに11回を数えるが今回左記要領により行われる。

日時 57年3月28日(日) 午後1時
 集合場所 京阪電車天満橋改札口前
 コース 天満青物市場跡→天満組惣会所跡→西山宗因向榮庵跡→天満宮(梅花殿能楽殿連歌所)→山片蟠桃篠崎小竹、緒方洪庵墓所
 会費 500円(パンフレット代その他)
 主催 浪速区下寺二ノ六ノ一九(柳テクノグループ内)
 大阪歴史の散歩道 川柳吟行会

病氣全快の主幹を迎え

'82新春おめでとう会

◇一月十五日・大成閣

那 須 鎮 彦

一月十五日は成人式の日で、奈良の若草山では、山焼きが行われる。

私は、最近歩くことが少ないので、少しの距離も歩くよう心がけている。

今日も、地下鉄なんば駅から大成閣まで歩くつもりで、なんばで降りて、虹の街から戎橋筋、心齋橋筋そして大成閣までの道のりの間に沢山の振り袖に会った。多分成人式を迎えた娘さんであろう。

今までは、日本髪を結い振り袖姿で歩く娘を見ると、失礼ながら、女があるいてるという見方であったのが、今日はどんな顔をしているのかと見てみると、二十歳って幼ない顔だなあという感想を持った。それは、多分私が歳を取ったからなのかもしれない。

さて、会場へ着くと、すでに柳宏子さんと呂志さんのお二人が来ておられた。

会場は五階和室、本当は舞台のある部屋の予定であったが、都合がつかなかったのか普通の和室になった。料理は中華、三三五五柳友の顔が揃い、あちこちで挨拶が交わされている。受付では与呂志さんが頑張っている。本当にいい人だ。今日の進行係は名司会の柳宏子さん、川柳塔でこの人の右に出る人はいない。

締切り時間の少し前、入口の方が賑やかになり、主幹が来られたから力を貸せと敏さんと言われ、迎えるに出ると、右のかたわらに小石奥さん、左手に杖をつかれた主幹が、すつくと立って、にこにこ顔でゆっくり歩いて来

られる。このお元氣、私の力も引っこんでしまった。会が見まわせる位置に椅子を置いてどっかと坐られた主幹のうれしそうなお顔、この顔は一生に何度も見せられぬ本心がそこにあった。

主幹のおめでとうの挨拶を受けた後、お体の都合もあったが、話したくて仕方の無い主幹は、どうしようもない程の話しのタネを持って来られたご様子、右側に坐っていた進行係の柳宏子さんが心配される程ではあったが今の私は、二時間でも三時間でも話したい気分だとすこぶるの機嫌、聞き入る私は、今にも涙が出そうなくらい、うれしい姿であった。

ご病気でふせっておられた時の色々の不安が、おめでとうの会へ出席出来たよう、こびで一掃されたのであろう。本当にうれしそうなお主幹に川柳塔魂が迸る。

四月四日の川柳塔三百号記念川柳大会は待っていない、必ずやって来る。そこへ主幹のこの元氣は柳友を奮い起たせる、そんな力があつた。

限られたページが憎らしくなる。もっと他にも、川村日満さんが来られた事も、正朗、芳子さんの電文の紹介も、宴会の主とすべき隠し芸の瓢太さんの奇術も、その他の方々の

味のある隠し芸も、主幹の御元気に負けてしまった。そんな印象のうれしい新年おめでとう会であった。

中島生々庵主幹あいさつ

御参会の皆様、新年おめでとうございます。健康にあふれたお姿や、うらかなお顔ばかりの皆様とこうして一堂に会し年頭のご挨拶を交すことの出来まことはご同慶の至りで心からお喜び申し上げます。



こんなに元気——生々庵主幹と小石奥様

顧りみれば、丁度昨年の今月今日にも、この会場で同様に

おめでとう会を持ちました。然しこの一年間にた

どった川柳塔社にとりましては必ずしも

平坦無事ではなく、むしろ

多事多端極まる年でありました。例えば不二

田一三夫君が亡くなって以来、葭乃奥様のご逝去に会い、戸田古方君、小西無鬼君等、有力同人が相つき亡くなり、また我が社では健康自慢で通って居った菊沢小松園君が突然大病におかされ未だに入院中であつたり、日頃

医者や薬の悪口をつづけていた私までが脳血栓の下に倒れ半身不随の状態となり一時はどうなる事かと、川柳塔もお先まっくらな暗雲

におおわれた状態となりました。

今日こうして大勢の皆様と輝かしい新年を迎えることが出来たのは川柳塔にとつてなん

と嬉しいことで、それは世にいうところの神



左から葉副主幹・形水・日満の諸氏

の助けもありましようが、また、路郎先生の遺徳の加護もありましよう。それと同時に私はこの半年にわたる闘病生活の病床にあつて一種の閃きのようなものを感じ、ひそかに一人で胸をつまらせたことがあります。それは誰いうとなくささやかれていた様に川柳塔には「川柳塔魂」というものがある。ほんとうにそういうものがあるとすれば正にこの閃きがこの非常時に勃然として姿をあらわした証拠であり、しかもその「川柳塔魂」が底知れぬほど根強いもので、しっかり握り合つた和合の形で他に余り類例をしらぬものとしみじみ感銘した次第であります。

誰の命令、指図もなく、自分のあるべきポストに向つて自分の判断を主とし、全力投球しながらこの非常時を乗り越えてくれた若い中堅同志の、間一髪をいれない活動を今更の如く感銘をもたれたものであります。

幸いにして新しい事務所も落ちつきを見せ運営も軌道に乗り、スムーズに流れるようになり、来る四月四日には川柳塔二百号記念大会を迎えるべく張り切りと希望にもえております。本年のおめでとう会を機会として益々大きな努力と精進を誓ひ合い、皆様のご期待に添いたいと思ひます。よろしくお願い申し上げます。

兼題「紅」

河村日満選

生々庵病いに勝てり紅潮す
ひとりの紅を添えれば初春の彩
紅指にたまる女の私語になる
稲荷山紅の鳥居をくぐる春
口紅に母は女を失わず
全快の宴へ薄き妻の紅
皿洗いしている母の薄い紅
初春の琴の音洩れる紅格子
紅を買う心がすこし残っている
紅濃ゆくこれが女子大生かいな
七人を育てた母の紅珊瑚
妻の紅濃くなり疑い深くなる
食紅の鮮からすぎる祝い膳
紅色の空から童話産れそう
紅を塗る野心鏡に写らない
口紅を落して母の顔になる
脱皮する少女にきつい紅花緒
紅たすき清水へ続く茶摘み唄
鏡から紅の多さをとがめられ
青年の眼は紅の炎持つ
紅一点 商店街の女僕とか
退院が近く口紅取り寄せる
食欲に一味添えた紅生薑
紅の噂残して来た女
紅をさし終えて女は別な貌
自閉症パレットにまだ紅残し
髪白くなりネクタイの紅を撰る

太茂津 君子 雀踊子 春蘭 春女 寿馬 紫香 醉々 健司 史好 栄子 君子 史好 吸江 潮花 紫香 雀踊子 健司 鎮彦 春巳 柳宏子 与呂志 柳宏子 与呂志 大茂津

兼題「橋」

西尾

栗選

口紅を女としてのさがで塗る
山茶花の紅が郵便人待つ
紅顔の頃のハングリーを持ち続け
紅いシャツ前へ廻って見つめられ
芋版の買状めでたい紅の色
ガム噛んで歌舞伎座に来る紅い爪
紅白の荷が大安の陽を走る
いつまでも若くありたい紅をさす
すこしトッパな男の好きな紅いシャツ
(人)隈どりの紅が流れる楽屋風呂
(地)こけしにも紅 雪国に春がくる
(天)紅生薑 主役の色を拒み抜く
(軸)口紅のシャツより財布案じられ

勝晴 鬼遊 水客 吸江 栗 勝晴 寿馬 あいき 潮花 一二三 水客 与呂志 萬の 日満 紫香 吸江 形水 水客 萬の 榮子 柳宏子 吸江 好子 柳宏子 吸江

極楽橋で待合わす約束し
橋に来て一層別れが辛くなる
橋のもとに佇ては旅がしたくなる
橋架かり島は打算の目で見つめ
賢人が住まなくなった橋の下
橋のもとに昔々の物語り
橋出来て道路に予算がない政治
(住)かけ橋になる乾盃の手を挙げる
(住)日本橋半分渡る映画村
(住)吊橋は猫背になって渡るまい
(住)逢いに行く橋の袂でけつまずき
(住)陸橋がだんだん高くなってくる
(人)御題朗詠 語尾がたかぶる橋の歌
(地)橋を渡ると錯覚がある街のいろ
(天)一びきの犬の後から橋わたる
(軸)勤勉な村人に逢う橋の上

〈出席者〉
中島生々庵・中島小石・西尾栗・西田柳宏子
児島与呂志・那須鎮彦・笠原吸江・高杉鬼遊
稲葉好子・宮尾あいき・小出智子・河野君子
北野久子・岩本雀踊子・藤村女・谷垣史好
西出楓葉・村田瓢太・黒川紫香・正本水客・
若柳潮花・大坂形水・香川酔々・飯田悦郎・
村上春巳・橋高薫風・山根いつを・西川景子
長谷川春蘭・清水健司・田形美緒・藤田泰子
福浦勝晴・齊藤三十四・塩満敏・阿萬萬的・
藤岡花梢・高橋千万子・野村太茂津・藤井一
二三・櫻谷寿馬・福本英子・河村日満

三十四 久子 君子 一二三 史好 花梢 女 女 水客 楓葉 勝晴 楓葉 太茂津 花梢 鬼遊

本社 二月旬会

会場 金属会館

八日 午後六時

朝から雪もよいの天候。立春は過ぎたとは言え、春はまだまだ遠い。だが会場は八十名近い出席で、六時には殆んど満席の盛況である。この活気、暖房のせいばかりではなく、はじめて「おはなし」に登壇する鬼遊氏への期待と好奇心から来たものかもしれない。さて、お目当てのはなしだが、固い話では面白くない、先月、多久志さんが貝原益軒の養生訓の中の男女の交わりの回数について触れておられたので、それに勇気づけられてと前置きして、一茶の日記を紹介。五十過ぎて三回妻を娶ったほどの人だそうだが、克明に記録したその回数が真実とするなら、私なんかには、まさに超人としか思えない。

出だしはすこぶる好調、話題はムンク展から黒沢明監督のエピソードへと飛んでゆくが

遂にタネ切れ、予定時間を余してしまふ。
 はじめてにしては上出来、85点あげる。
 とは栗副主幹の評。苦勞さまでした。

初出席は松下蕉露氏(八尾市) 藤田泰子さん(富田林市)。月間賞は津守柳伸さんが獲得された。

(史 好)
 (受付)与呂志・重人
 (進行)柳宏子、記録・重人

出席 栗・春蘭・岳人・与呂志・満津子・

道子・雅風・静歩・滋雀・勝美・憲祐・美幸
 作二郎・柳伸・悦郎・好子・水客・紫香・美
 智子・蘭・川狂子・春江・鬼遊・幸・英子・
 勝晴・喜風・喜一郎・右近・楓楽・瓢太・蕉
 露・千万子・綾珠・重人・太茂津・武太・ト
 メ子・泰子・恭太・薫風・千代三・翠光・小
 路・山久・寿美子・文秋・規不風・健司・庸
 佑・酔々・白水・吸江・三十四・柳宏子・英
 壬子・花村・富子・涼一・射月芳・萬的・史
 好・鎮彦・小雅子・智子・敏・雀踊子・度・
 惠美子・頂留子・幸太郎・寿子・甘平・弥生

席題 「いたずら」 飯田悦郎選

美しい花で手折ってみたくなり
 いたずらもエッチになった現代っ子
 うず巻が二つ一生涯いたずらで

道子
白水
涼一

いたずらを叱れぬ教師にも困り
 仏さまゴメンナサイといたずらっ子
 いたずらしそうな顔も羅漢の中にいる
 いたずら好きはいともいたずらされている
 いたずらで済ませておけぬ核装備
 快方に向っていたずらもう始め
 いたずらが好きで漫画の虫になり
 いたずらの相合傘が縁となり
 いたずらっぽい瞳に誘惑の罫がある
 図にのったいたずらブレイクもつきかず
 いたずらは親父の影の中でやる
 いたずらで済まなくなつた四月馬鹿
 いたずらをじつと睨んでいるかがし
 運命のいたずらが待つ数寄屋橋
 五六人寄るといたずらしたくなり
 希望のある虹はいたずらではかけぬ
 いたずらのスケール将来期待する
 咳込んだひといたずらを託げる
 いたずらの見合話に乗って来る
 いたずらで描いたデザイン気に入られ
 いたずらが好きな神様きて離婚
 いたずらが止まり成人式に出る
 退屈な男いたずら考える
 一本の縄でいたずら生きてくる
 言葉尻いたずらっぽい眼になっている

恭太
富子
萬的
度
勝美
花村
静歩
蕉露
寿子
柳宏子
鎮彦
滋雀
酔々
蕉露
紫香
鎮彦
楓楽
惠美子
蕉露
酔々
柳宏子
規不風
白水
美智子
重人
水客

軽いいたずらをチョコレートと包む 惠美子

雪だるまは雪のいたずらから生れ 惠美子

いたずらが過ぎて頂上から落ちる 規不風

いたずらがいるから道草して帰る 紫香

風向を見ていたずらを考える 英子

いたずらな風は女を選ばない 美幸

いたずらな風が運んだスキヤンダル 道子

いたずらをするから犬が意地を持ち 悦郎

席題「鎖」 安藤寿美子選

タイムカード鎖の重さ知っている 幸

ジェット機にはじめて乗った手の鎖 小路

駄馬になる父の鎖は軽くなる 雀踊子

目に見えぬ鎖でがんじがらめてす 射月芳

鎖編み愛を育ててゆくセーター 英壬子

錆びついた鎖貴男と結んでる 山久

鎖断つ意志を固めた日の女 悦郎

死ぬまでの鎖がついている指輪 憲祐

ドアに鎖つけるとすぐねむくなる 健司

愛し合うための鎖だなおもつ 幸

妻の持つ鎖の長さを泳がされ 雀踊子

番犬は鎖の範囲守備をする 喜一郎

鎖からはずされたように一人旅 規不風

錆ついた鎖に魚板ぶら下がり 醉々

からみつく鎖に噂を信じまい 与呂志

海荒れて大漁節を聞く鎖 岳人

あたたかく少し冷たい手鎖で 惠美子

銀の鎖は銀のクルスと仲がよい 惠美子

鎖のない犬に港が遠すぎる 作二郎

生活を繋ぐ鎖の定期券 悦郎

ドアチェーンアタッシユケースの幅であき 栗

あれいらい見えぬ鎖にしばられる 山久

とある日の鎖が全部切れてくる 美智子

金婚式の鎖はのびたりちぢんだり 栗

鎖から抜けてライオン散歩する 英子

老犬の鎖もの憂い音がする 滋雀

妻や子に鎖の端を握られる 射月芳

老残の鎖の音は聞かせまい 水客

鎖が妻は死ぬまで隠し持つ 涼一

ドアチェーンはずすと入りこむ男 健司

背に妻の鎖を感じ朝を発つ 右近

自由のない鎖は過保護かも知れぬ 雀踊子

鎖切る勇気ないから黙ってる 泰子

百本の鎖が切れるだまし舟 美幸

妻の鎖でゴムの鎖がついている 憲祐

海鳴りを恐れ鎖は錆びている 岳人

鎖みな解き放たれたデスマスク 楓楽

鎖はすして信じた犬に逃げられる 規不風

切った苦の鎖はお釈迦様が持ち 寿美子

兼題「暗示」 那須鎮彦選

きつと打てると監督が背を叩く 恭太

ひよつとこの暗示おかめがすぐかかる 重人

ヒントの一 ヒントの二は横をむき 栗

暗示にも天衣無縫は気がつかず 醉々

有終の美を暗示して劇終る 敏

ふところが軽く暗示にかかりそう 史好

幸先がいねえ茶柱立ってるよ 寿美子

絵に画いた餅に暗示は隠される 軒太楼

合格の暗示が欲しい絵馬の列 失名

三度目の正直だよという暗示 寿美子

出直しへ暗示をくれた蜘蛛の糸 美幸

悪い方へ悪い方へと自己暗示 柳宏子

それとなく肩を叩いておく暗示 小雅子

折角の暗示が解けぬ血の巡り 幸一

曖昧な暗示に核が伏せてある 滋雀

暗示したのへのこのこと聞きに来る 翠光

気が弱いだけに暗示によくかかり 哲夫

暗示から不意に未来が廻り出す 寿子

眼の中の暗示が読める仲となり 蕉露

くり返す言葉の中にある暗示 多久志

暗示かけ信管だけは抜いて置く 悦郎

潮時へ送る暗示が届かない 翠光

異常気象神の暗示かも知れぬ 柳宏子

衣紋掛け母の暗示がかけてある 富子

輪廻だと思ふ暗示にすぐかかる 醉々

大器晚成妻は暗示を信じない 鬼遊

他愛ない暗示を女将は笑っている 萬的

いぬ年の男にかけておく暗示

バレンタインのリボンにあたたい暗示

やっかいな善人暗示が通じない

如來の瞳見てると力湧いてくる

傷口の痛みがなれるママのつば

もう暗示きかぬハンドル持っている

あたたい暗示すなりまるが画け

長男に暗示かけると走り出す

阿修羅像の指の数ほど暗示する

てのひらの運命線信じしきり

色のある暗示がだんだん胃にたまる

いざ征かん百円玉が表むく

出逢いから鼻緒が切れている暗示

希望の羽根を持たせてやる暗示

兼題「結ぶ」

児島与呂志選

結ばれた昔を偲ぶ老夫婦

近所から帯結ぶ手を借りられる

結び目をほどくと別れの時が来る

縁結ぶ仲人さんの舌の先

セットした帯で結び目気にしない

ペテランの刑事結び目見逃がさず

ネクタイを結び七人の敵に会う

きつく結んで面白くない財布

いいことがあったに結び目がとけぬ

一合の酒分けおって和を結ぶ

惠美子

惠美子

花村

度

度

健司

はつ絵

岳人

作二郎

鬼遊

水客

重人

英千子

鎮彦

山久

小路

射月芳

甘平

武太

庸佑

敏

重人

美智子

弥生

結び目をほどくと母の愛がはね

母が来て器用に結び目といいく

縁結ぶ神も縁解く神もいる

大吉が出るまでみくじ枝に結ぶ

帯結ぶのにてこずっている見合い

がんじがらめの絆の上に安住し

慶びの母は涙で帯結ぶ

カラフルなりボンを結ぶもの忘れ

羽織の紐結んで解いてためらう娘

きっかけはひよんな事から結ばれて

靴紐を結び直している思案

帯めきつく結んで女に隙がない

水引の結び目はけてきた夫婦

風呂敷を結んで思う母のこと

神前で結んだ契りも風に解け

妥協した眼に結び目が見えてくる

札束と手首を結ぶヒモがある

お太鼓がうまく結べた三面鏡

おみくじを結んだ枝に花が咲き

正倉院古代の夢を結んでる

リボンを結ぶ少うし若くなりたくて

結ばれて女はたえることも知る

結ばれて女は嘘をもうつかぬ

結び目がほどけて心のぞかれる

反抗の口はキリリと一文字

結び目の深さへたたんでおく絆

紫香

春江

千代三

蕉露

翠光

道子

美幸

富子

綾珠

勝晴

柳宏子

萬的

吸江

勝美

勝美

水客

健司

英千子

瓢太

酔々

度

鎮彦

鎮彦

美智子

柳伸

寿子

仲人の口にまんまと結ばれる

結び目が四人の指を手古摺らせ

天と地の恵みを結ぶ奴舂

靴のひも結んで山に身構える

紅白を結ぶと絆強くなる

結び目を確め夫婦の旅づく

楽しく踊る小さな手を結ぶ

結んでほめて騙しつづける紐がある

結び目がほどけかかっている絆

糸と糸結ぶ電話にある童話

結び目に父を信じて母愛し

兼題「指名」

西田 柳宏子選

新顔を突如指名であわてさせ

指名の祝辞べんちゃら言わされる

指名した司会も困る長祝辞

いい喉をもつて指名を待つており

指名待ちきれず社長勝手に誂い出し

どこにでも居そうな指名犯の顔

授業参観指名にどきどき親がする

指名に依つてとやおら取るマイク

鬼遊

富子

岳人

敏

好子

満津子

悦郎

幸

杲

岳人

与呂志

哲夫

幸一

はつ絵

多志

静馬

白水

千万子

右近

訂正

2月号P.25若本多久志氏の句を左記のとおり訂正します。

傘寿なお凡夫の欲は九十まで

指名したのに思い出しても呉れず
質問と答はきめてある指名

一たんは断り指名は受ける肚

指名から逃れ末席温める

指名からもれた男の持つ反旗

逆指名男たたかう顔になる

戦犯の指名へ誰もが背をむける

担がれて立つゝ指名のおとし穴

級長に指名弾んだ子が帰る

カラオケの指名待ちきれない男

一番に指名されたはぶりっ子で

指名せぬ奴が来てだはん今晩は

御指名の声もかからぬ雑兵で

指名され立つたら言葉忘れてた

大物で指名手配も全国区

首班指名のなぜか空しい万歳よ

指名されてからの重さが胃に溜まり

かくれんぼ弾む指名が透き通る

決死隊生きて帰れと指名する

兵隊のラッパをいつも指名する

指名され男は勲章つけてくる

いつも指名を拒む男の怒り肩

白羽の矢持った社長の眼をにらむ

交番は指名手配が留守番

当然のように指名の位置にいる

ご指名をせぬのに鬼も福も来る

翠光

度

庸佑

英子

雀踊子

紫香

弘生

滋雀

美智子

英子

栗

右近

甘平

泰子

憲祐

史好

幸

美幸

花村

作一郎

岳人

太茂津

鎮彦

泰子

与呂志

道子

御指名によってと切札らしくなる
ばあちゃんとならおシッコに行くと言う

指名から洩れて居する固い椅子

見どころがあるので名として叱りつけ

ピエロにはならぬ指名を聞き流し

指名など知らず真直ぐマイウェイ

兼題「婊」

西尾

栗選

新聞紙まるめて膝をたしなめる

母子家庭涙が先にたつ

婊のよい犬がわが家の自慢なり

帰省して先ず褒められた子の婊

月給をそっくり呉れるのも婊

かあちゃんの座席も取れという婊

父と母婊さびしき糸電話

婊という字が読めない親ばかり

お屋敷の婊が匂う御曹司

血統書付きで婊を知らぬ犬

日教組婊は親という論理

婊系取る手に女戻ります

三人の婊それぞれ細雪

そこはかとなく上品な身だしなみ

仲人は婊にふれず話し出し

動物園の猿が喋っている婊

先生の婊はPTAを向き

青春の苦勞貧乏性に婊られ

水客

満津子

幸

恭太

滋雀

柳宏子

武太

一二三

吸江

小路

度

恭太

岳人

健司

どんたく

幸一

多久志

富子

千代三

規不風

好子

史好

雅風

白水

押し入れの婊は遠くなりけり
檜山の雪は婊に耐えている

受付に社長婊の顔がある

貸し借りはいつもゼロにする婊

端座する父の無言にしつけられ

男手で育てた婊なら許す

学校にお願いしますという婊

参観日婊の悪さもろに出る

絶る手も時には離す子の婊

教室の窓割る婊などしない

おろそかに出来ぬ婊が道しるべ

母ひとり子ひとり婊のまま育ち

ステンドグラス遠い婊を秘めている

婊系まだかかっている形見分け

共稼ぎの子にしては婊行き届き

銀行のいんぎん無札という婊

児に夢を託す婊は鬼になる

中流の婊にパンがあり余る

絹糸になりたく思ふ婊系

婊系一番上は春の柄

文部省が何を婊けるカレーの日

家紋の中の婊へ阿呆になる

民宿で日頃の婊みせつける

早起きの婊日曜も起きてくる

婊系はずすと世間見えてくる

婊とは別に教育勅語暗記する

美幸

水客

憲祐

弥生

滋雀

恵美子

楓

トメ子

雅風

小路

春江

紫香

水客

道子

綾珠

憲祐

一二三

美幸

千代三

小路

鬼遊

雀踊子

酔々

道子

柳伸

栗

老地柳城

■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。
十七字以内の句に、下三マスに雅号。

(整理・香川酔々)

駒つなぎ川柳会

里 小路報

遠い大鼓に心が揺れている大人
今年も終る後悔ばかりでないことも
花占い終りにならぬ片想い
ひとり寝て地球の終りなどおもう
数学の時間終ると眼が活きる
別れ上手な男に軽く幕が降り
水の流れに時間はいつとも妥協する
ブライドを捨てて女の性終る
サヨナラを楽しく言える人と会う
ざわめきが現実になるフィナーレ
はがらかに唄い聖夜を締めくくる
もう終る一升瓶へ妻の愚痴
ジエンドあつけれかんとした最後
陽のあたる椅子で終りを過信する
勝負は終った馬券破つて見る夕陽
闘病記憶りが見えて書き終る
終りから読むと犯人死んでいた
歩道橋の終り明日はつながらぬ
蟹穴へ帰ると一日が終る
写経書き終り一つの罪洗つ

酔々 智子 射月芳 冬二 千代三 惠美子 元紀 美乙女 鬼遊 柳伸 桐下 雅風 柳宏子 信治 萬的 憲祐 岳兎 雀踊子 規不風

終着駅を前へ押し押し生きている
さよならはまだまだ言えぬ煩惱で
終点が出発点やと悟れない
つつがなく今年も終る酒の味
銭湯に今日の疲れをおいてくる
約束が終ると酒の席にする

勝山双葉川柳会

河野

近ずいて花の芯まで覗くまい
橋山に近いが悟りに遠くいる
遠くて近い実家を妻がもっている
クリスマス神祕の扉あける子等
逢えるかも知れない人待つクリスマス
クリスマス迄待つて玩具を買ってやる
一人棲む自由が万年床にある
生きてると思うふとんの陽の温み
病む父のふとんのかさが気にかかり
共稼ぎふとんと干せぬ日が続き
布団綴す母の手際を娘に教え
羽根ふとん母にとまどいさせている
子のサービス計算すくでも嬉しがり
堂々とサービス料と書いてある
何かある妻のサービス行き届き

川柳高知

川竹

手ぶらでは行けぬ招待状の裏
善人を通して妻には借が出来
流れ行く月日は早し桐一葉
ほどき物窓の落葉にせかされる
仕入れ物妻の意図を確かめる
北風が吹けば豆腐がよかく売れる
天秤に掛ける見合いの運不運
発車して母の温みを開けてみる

君子報

黒川

田鶴子

もういくつ寝ると歌った幼い日
老いの身にかけ足でくる十二月
十一月お金に羽根がはえてくる
空白の多い日記で師走くる
祇園さながらあすを迎える火を貰う
渡り鳥やと我家の巣に戻る
一生をピエロときめた靴がちび
小走りに行く夕暮の市場籠
孫二人チヨコンと並び手を合わす
仏心の優しさ強く言い切れず
どん底で仏に遠い日がつづき
野仏によう似た顔のお婆さん
忘れてた人かた恩をかえされる
亡父の恩思い出さずほだ掌にこぼれ
風呂代もないと短い子の便り
妻が病み朝のリズムが狂い出す
長留守で見ずに終った菊を抜く
硝子拭く今年の曇り落ちるまで
自閉児の合鍵がなく日が暮れる

松風報

虹川柳俱樂部

一三三 美代 凡九郎 史好 康江 悦郎 田鶴子 楓楽 智子 芙佐女 千里 智慧子 秋子 藤子 久子 節子 洋子 頂留子 好子 いく子 君子 天九 弘生 登舟 冬木 竹萌 三吉 広風 節子

痛さより派手に転んだ恥ずかしさ
入信を断る嘘が尽きてくる
ウインドの春へ女の夢が翺ぶ
母として女の涙子に見せず
年金の額では付添いつけれず
客去んだ後の欠伸へ声が出る
尼崎いくしま川柳会
有限会社柳には割当ある資本
三分の一は布団の中で生き
道路工事川と線路にはさまれて
紅白の饅頭白が残ってる

新岡回天子報

康子 秀子 一二三 松風 紫香報 中石 唯夫 保藏 郁栄 すえ 浩 貞子 千子 牧郎 幸香 美智子 湖澄 ハツエ 晴子 玉子 和子 虹汀 回天子 四郎 実

老いの背よお袋さんと時けり
 やがて散るバラの命の今盛り
 果しなき食養生とはさびしかり
 傷ついた指へまっすぐ冬が来る
 子の寝顔今日一日がありがたし
 尻もちをつく雑草の根の深さ
 特選へ他人は血筋と軽く言つ
 落葉かく音よたしかに秋のもの
 慰めの言葉を探す悲しい日
 設計図これで最後と言い切れず
 はっきりとあしたを得たり日記閉す
 利己主義のまま現代の行末よ
 何気ない甘えにもうい父の皺
 西宮北口句会
 杉浦婦美子報
 着ぶくれのふところ寒い風が抜け
 白髪染めおしゃれは老いの葉かも
 孫遊ぶ声が聞えてくる電話
 枯すすき歌う故郷のない男
 デパートも大声で売る十二月
 そば処くぐるのれんに店の味
 親せきの声なき声が気にかかり
 十二月ポーナス貰うまでは暇
 丁寧な言葉でチクリ刺してくる
 ポーナスの噂に遠く老夫婦
 あせりと悔い残り日はかり数えてる
 金策へ社長も廻る十二月
 新札がしわくちやに成る歳の市
 一年の義理をすませて十二月
 無に帰る煙も吞んで空の青
 いいことがあった日ひとり豆を煮る
 いい夢をときどきくれるそばまくら

不朽 敬水 蘭幸 比呂子 鈍舟 節夫 貞子 かつ子 一路 観杏 シゲ子 令子 美智子 文子 紫香 かすみ 春江 静枝 みつ子 光子 婦美子 ふみ 千子 笑子 弘生 冬生 はつ絵 宏子 幽香

つこもりの金借る客へ蕎麦を出す
 みそ蕎麦来年こそは頑張ろう
 俺はそば私ばうどん老夫婦
 城北川柳会
 川口
 かげろうを追いかけている預金帳
 ルノアル裸婦の片手にある羞恥
 生いたちをきれいにたたむ舞扇
 数の子に箸が出かねる三ヶ日
 嵯峨野ゆく嵯峨は竹やぶ小石道
 張切つて又失面に立たす大晦日
 何となくド忘れしたよう大晦日
 父権地に落ちてテレビもまんならず
 嫁がせて父の心に穴があき
 お正月犬まで腹をこわして居
 行草は土光 瀬島の手腕でも
 真四角な土地をまあるくする手腕
 新聞に手彫りの実技して見せる
 亡き父と話したくて経を読む
 父帰る 現代版の多いこと
 子等独立父は独りの旅となる
 一、二、三風呂で数えてくれた父
 新風よ父の足跡消さす吹け
 呱呱の声若い父への或る序曲
 母の日の影で父の日照吹きする
 京都塔の会
 松川
 祖母の留守二人は二人のゴミの量
 水を打つ水を仔犬が飲みに来る
 思い切りとんだ大きな水たまり
 嘘のある日記閉じれば風の音
 青空へ思いのままに柿熟れる
 まんじゅしやけ秋の女神の裳とも

半歩 千世子 多久志 弘生報 満津子 弘 婦美子 捷一 テルミ 圭介 ふみ 松太郎 寿幸 星斗 新一郎 道子 三十四 富久子 倫子 達一郎 ふみ 美恵 公一 右近 杜的報 芳子 紫香 明代 美穂 遊香 水客

八起きめは一つ八卦を信じよう
 塔さびれ雪も悲しめて降る
 五十坂塔をあおいでまた歩く
 湯気の中湯葉一つずつ出来上り
 猿芝居の猿の真面目な顔に逢う
 泣かせどこ子役も心得ている仕草
 花道へ声がかかった飛び六方
 最敬札が長いと思ったその昔
 長い眼で見てねと自信ある口調
 川柳わかやま 堀端 三男報
 素晴しい笑顔を呉れた車椅子
 残り火へ女のうたが燃え始め
 恵方など知らぬまんの無事な日々
 野良犬は人の温みを知っている
 負け犬のポーズで今を堪えておく
 人間不信犬に首輪がはずせない
 方便に負け犬となる生きる知恵
 初春は矢張り日本の顔となる
 エンジンをかけて始まる今日の修羅
 母と子の断絶始まる今日の日々
 匂い袋に母の笑いが残ってる
 よく笑う一日だった腹が減り
 何事か見ぬいた妻のうす笑い
 石原伯峰氏から
 川柳塔改題二百号のお祝
 金一封 拝受致しました
 川柳塔社
 桐下 笛雄 飛鳥 規不 求芽 潮花 杜的 花代子 三男報 和子 幸 茶の子 佐代子 武雄 裕美 秀雄 紀久子 あつむ 勇太 酔々 正博 三千代

もう一人の私を笑う乱れ菴

神様が呉れた笑いに包まれる

善人の猪口が本音を吐く年始

飼い犬の反旗くさりが錆びている

負け犬が味方と思う日の焦り

盲人の目になる犬の静かなり

遠吠えの犬に或る日の自画を見る

南大阪川柳会

中川

愛情が深くて夫婦にある無言

愛の名にすり変えている親のエゴ

文鳥の手におかめの愛を知る

ひよつことおかめの愛でつつがなし

鉄拳の愛は涙を噛んでいる

若かったなと意気込みを振り返る

竹槍という意気込みの語りぐさ

我が道に疑いはない向い風

疑いをするのと視野が広がる

人間の善疑わぬ仏の眼

疑えはきりがないので信じとく

疑いをかけた夫婦のもつれ糸

エンジンがかかって狼が太鼓打つ

この坂は無理エンジンが泣いている

エンジンがかかったらしい愛を知り

ガソリンが入るとエンジンよく喋り

にぎりめし栄養論はひっこめる

駄馬になる父の大きなにぎりめし

自信ないエンピツですぐ折れたがる

4Bを持つとスラスラ描ける裸婦

川柳塔まつえ

恒松

一流のスーツで中味カバーする

軽薄な男が中味ふと見せる

雅代

光代

翠雨

善太

三男

緑楼

凡九郎

滋雀報

鎮彦

楓楽

滋雀

千梢

一二三

文秋

度

信治

憲祐

萬的

瓢太

春蘭

醉々

良

柳伸

勝美

智子

雀踊子

柳宏子

千代三

町柳報

与根一

早苗

味自慢祖母の年期のこんぶ巻き

もう聞けぬ自慢塾八等だけ残り

捨て鉢の女は魔術師と変る

地図にない街で女が迷ってる

扶養家族でいても女の座の強さ

平等の権利と女捨てたがり

着くずれを二十の女もてあまし

幸せにあらす女の冷たい手

お喋りに殺されそうな黒一点

初詣で始発のベルがけたたまし

始発駅いつもの顔が駆けてくる

恵方から来た客妙にもてなされ

年明けに日本の恵方が見当らぬ

人間の弱み恵方を信じきり

川柳ささやま

河原みのる報

さかすきがお帰りを待つ父の席

盃を持つ手が明日の鎌を振る

二日酔いもう盃も見たくない

盃の七十連隊懐かしみ

以心伝心合図はいらぬ熱いお茶

合図などいらぬ夫婦の瞳が温い

奇術師の合図を鳩が胸で待つ

算盤をはじいて合図なき生活

漬物の石の重さを母に問う

身重さえ知らぬ女の不幸せ

重荷にはなりとうはない明日があり

若い喪主花輪の重みのしかかる

終盤へ来て一石を見損い

原爆碑核で聞けぬ耳たぬ手打ち

菜の花句会

高杉

通児

孤呂二

巡歩

みのる

芳子

舞吉

鳳人

快哉

鶴丸

登美也

正朗

孝

寿美子

町紅

可住

一盃

越山

ひか平

ゆう也

テル

和子

美智子

エキオ

くにの

千代子

宗珠

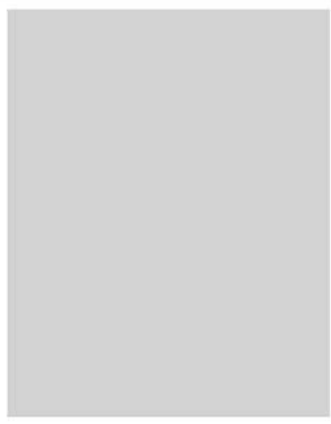
素水

文平

百合子

鬼遊報

昭子



懐かしい地名地図から消えて行く

お元日は雑煮でほっとかれ

嘘ばれた電話ハイハイハイで切り

染しき音でお茶碗割れたことはない

木枯しの口縄坂をおりてゆく

倅せな男で妻より先に逝き

艶のある電話を回すくすり指

西成の詩人が酔える昼の酒

しあわせが過ぎてまぶたが重くなり

政界の地図札束で塗り替える

大阪で聞けばわかると河内弁

仕合せの中に住んでる不感症

大統領直線引いた地図を持つ

曽根崎署每晚達う虎を飼う

それなりやしあわせがある夫婦箸

千鳥足停れば野良犬立ち降り

松屋町風はあがつた型で吊り

夫婦茶碗旧憲法を守りぬき

みつる

柳伸

与呂志

度

健司

柳宏子

寿馬

雀踊子

酔々

射月芳

儀一

凡九郎

鎮彦

蕉露

美幸

糸葉

昭子

長雨にばやく男の茶碗酒

よくしゃべる男しあわせ薄い影

寺町の有名無名も石になる

電柱にビラ愛犬が戻らない

夫婦茶碗どちらが先に欠けるのか

わかあゆ川柳会 小砂

秋日和カラスの声も湧えて昏れ

老いの坂なれば十字路たじろがず

十字路の向うに高層ビルそびえ

十字路を甘く見て来た廻り道

十字路に右折のバイク立往生

嫁った娘が十字路の出に問うてくる

電池切れ時に逆らう時計がひとつ

心待ちしていた友と激論し

ちびりちびり猪口で恭敵待つ夜長

右左見ていて十字路抜けられぬ

相談を心待ちしている丸い背な

十字路に運命の綱がかけてある

心待ちした順番が来ないまま

からからと十字路枯葉をもてあそび

十字路のカブミラーの果し合い

川柳ねやがわ 高田 博泉報

スピードのスリルによっている罰金

後悔をさせて罰金役終る

体温が引いて周囲が生きてきた

貸す金を持ってまで行くお人好し

罰金で済ませ忘れているモラル

悦郎 弥生 幸生 頂留子 鬼遊 白丁報

敏明 恒星 タケノ ふみ 秀穂 民子 志保 輝水 美栄 蔵栄 芳枝 鈴江 清泉 はるみ 白汀 柳歩 山久 勇三郎 満津子 花世 晴風

だんらんのお炬燵で実つてゆく女

はち切れた勘忍袋妻が貼り

夫から取る罰金をへそくりし

罰金の分だけ嘘をついている

障害の人が豊かな会話もつ

春に吹く芽を眠らせて冬の詩

すぐき漬賀茂の女に冬がくる

罰金がスリルになった定期券

行く年のけがれを洗う暮の雨

逝く冬の名残り雪崩の音にきく

剣難の相あり出張地に仆る

子約する常連を待つフグの顔

ボーナスで今度は妻と団交し

体温が通うと泣ける雪ダルマ

編針の先あらそつて冬に入る

幸せは児の体温を知る乳房

体温のサーモスタット故障なし

人形へ娘の夢を着せている

午前様娘の好物ぶらぶらと

言いにくい事あり鏡を先にみる

体温をのこしたままに干す蒲団

真つ当に生きる男のプログラム

雑布をしぼって嘘を聞いておく

北風へじつと耐える赤ポスト

はちきれそうなのはまされてるラッシュ

親の目を盗む自由が嬉しくて

罰金の工面が出来たコップ酒

琴音

一途

亜也子

野生

英壬子

右近

一江

亜鈍

あいき

良子

三千子

敬次

一弘

胡次郎

尚子

一笑

一すみ

政野

シマ子

亜成

双舟

紫香

度

小路

柳宏子

入仙

亜成

ひっそりと病院にある霊安室

自画像へ位置付けている団子鼻

見えてきた峠へ足は亀になる

気にしてる鼻へ視線が止まってる

病床の峠を越えて朝日出る

鼻柱折ったつもりが悔残り

波風を親父の鼻はかきわけ

整形で鼻の温みを捨てて来る

ひっそりと隣は松茸たべてはる

浴場の鏡にあばら骨目立つ

鼻メガネ使える鼻を持ち合せ

堀江正朗・芳子句集

「二人三脚」

昭和39年から今日まで、生活即川柳のご

夫婦の句、千九百句を集録。

■題字 西尾 栗

■序文 中島生々庵・尼 緑之助

■跋 橘高薫風

■画 直原玉青画伯

■B6判函入り・三百頁

■領価 二千元(送料共)

■申込みは

島根県大原郡木次町13

堀江正朗

振替 松江017491

発行所 川柳塔社

魚三 聖地 博泉 一扇 幸坊 千夢 有登 弥生 入仙

静寂に負けたか池の鯉が跳ね
ヒスデリックな口調へ一時逃げておく

好 郎
形水報

犬猿の仲で養老院へ逃げ
子育てを終えた母の一人旅

秋 月
元 一

食べるのと逃げるの早い男です
にげ道はないことにして自信もつ

亜 成
健 坊

いわくありそな女のひとり旅
フルムーン親孝行の旅となり

柳 五郎
隆 雄

冬將軍殿しい顔でやってくる
それぞれの舞台で人生演じてる

博 泉
亜也子

手を振って別れる旅がなつかしい
フルムーンいたわりながらの二人旅

久米雄
玉 水

それぞれの舞台で人生演じてる
ふだん着の顔をみてゆく不意の客

秀 川
てまり

酒たばこ止めても寿命ままたぬ
寿命などないよと老婆白を越し

定 平
青 銅

スランブと逃げてかべを厚くする
寒いぼが見えてる舞台の前の席

雅 洋
百合子

洋風に空を取られたやつこ風
奴風采を切られてはととする

美津子
正 信

逃げないで度胸すえたらうまくいき
年輪を刻む顔見て逆らえず

晴 男
雄 峰

うちの大戌年生れて律義者
新春の悲しいニュースに耳が冷え

澄 子
維 久子

人生の舞台は降りる場所がない
舞台裏役者以上に氣を使い

幸 坊
美佐子

銀婚を祝う初春旅の宿
初春へ心の日の出見る夫婦

喜 醉
伸 子

デスマスク嘘いつわりのない真顔
ひと廻り大きく見せて舞う舞台

聖 地
登

血統書あるから相手見つからず
犬抱いて少女は思い出たぐりよせ

泰 子
花 梢

逃げた自分をせめて日記に書いておく
逃げるのがやつとでしたとまだしやべり

有 一
千 夢

ため息の悩みを犬にのぞかれる
野良犬の自由羨む小屋の犬

美 代
美 佐子

顕微鏡覗くお顔の天皇さん
舞台から奈落を走る猿之助

入 仙
形 水

風上げに犬も一緒に走ってる
犬の願い飼うなら途中で捨てないで

き ぬ
利 重

本人の希望だからと書き添える
福耳に希望が過ぎたままに老ゆ

照 路
宏 大

戌年で捨てた犬さなもてはやし
野良犬の良心益裁見て通り

利 重
岳 人

最後まで希望持たせた宝くじ
三浪も辞さず希望校にかけ

恒 洋
健 一

本を書く女でひとり旅つづく
福の神舞いこみそな初笑い

正 朗
芳 子

人前で憚りもなく犬の恋
不幸な日知ってか犬が寄り付かず

哲 郎
番 茶

客絶えてちよつとの閑を三ヶ日
女房のぐち盃は伏せておく

秀 子
は じめ

そのときのため犬歯を研いでおく
犬の日の腹帯家族で祝い膳

博 友
草 風

初詣受験念する子がひとり
三ヶ日和服で女とりもとどし

孝 華
と み子

佐加恵

佐加恵

●時実新子

「花の結び目」

— 新子の表現十二章 —

句集『新子』以来瞠目のうちに展開されてきた新子句の世界。現代川柳の頂点を創った作家が自らを露わにしながら書きおろした川柳秘史。

「詩は川柳ではない、しかし川柳は詩である」という新子の立場。人間と人世を濃密に凝縮し、研ぎすました一句によって観照する世界。伝統をふまえて現代に生きる現代川柳の新たな指針を説く新子とその「展望」を拓く作家たち。

人びとは、本書によつてはじめて現代川柳の世界と、この稀有な作家の真髄を知ることとなる。

■ 四六判上製
■ 一七〇〇円 (送料二四〇円)

《発行所》
東京都新宿区百人町1—23—14

たいまつ社

電話 03・3711・1590
振替 東京 4—24362

初鏡のぞく女へ春の裾

大盃の朱に染まりゆく喜寿の顔

孫の芸 腹を抱える初笑い

盃の中へ男の心解け

金盃の味のことなる酒と知り

温泉で老いの肌にも紅が差す

温泉にひたれば心も皺もののび

初詣孫も小さく手で拝み

温泉に若さ戻して歌くらべ

おみくじに夢を結んで初詣

降る雪を眺め情趣の湯につかり

正月のゲームへ父も割って入り

初春の晴着へたぎる金の音

ジバンも今日は晴着へおしとやか

お里から届く晴着の笑い顔

晴着きて花束贈呈孫がする

正月はホテルへ逃げてゆく都会

喜びの日を待つ盃は酔うてくる

川柳化粧櫓

宴会でとうとう本音を吐いた友

子離れの寂しさ酒の量が減る

嫁ぐ娘へ涙かくせぬ出世酒

急用の電話で呼出す雀仲間

特等を欲のない子が持ち帰る

買物へもう出たがらぬ子の育ち

手から手へ渡つて初孫撮される

コーヒーを一人のみに行く日の孤独

真すぐに伸び若松初日刺す

みどり

一葉

福子

一郎

鶏生

よし子

晴代

喜代美

吉野

百代

富子

雪路

ゆき子

幸子

蚊声

峰雪

紫雪

明朗

香

三青

遊香

多津

富多

大鷹

葉香

岳詩

紅月

秋月

川柳たけはら

三百号重ねて拝す初日の出

ふり向けば馬鹿な男にされそうて

ボナナスの話巷の風に聞く

身替りの金魚は微動だにしない

かくれんぼ背中いつばい真冬たり

日だまりの一つ一つにある童話

職人より槌の艶槌の音

バックミュージックは冬のメロデー枯葉散る

そろばんが好きで特訓苦にしない

うちゅうには星の数だけ夢がある

父の足跡をたどると坂ばかり

春そこに長女は走り次女は這う

脇役へ年輪の輪が一つふえ

墨色のやすらぎ和紙のデリカシー

うちとける言葉さをさがす初対面

初孫の重みをしかと抱いてみる

海に出てみても流れに逆らえぬ

晴天へ不平不満を言いそびれ

数ふえる趣味の絆の年賀状

年金で食べる策練る夫婦箸

ストーフはぬくいがかはかせのこだい

岸和田川柳会

日溜りへ老犬の小屋持つてくる

犬の鼻人にもほし着視庁

ナメ猫に負けるな犬は驚せられる

大ころりころりじゃれてるボロの靴

暑いとも言えず犬は着せられる

森井 舊居報

静水

鬼焼

房子

敬子

観杏

笑子

不朽

中三愛

小六紀

小四仁昭

菁居

蘭幸

節夫

比呂子

鈍舟

貞子

一路

かつ子

シゲヨ

秀水

6歳方昭

武助報

せつ子

湧波

浪速子

こう

幸代

円満な人になれての冬日和

円満な家で勝てない妻がいる

円満を心得ている妥協線

円満な秘訣隣へお裾分け

会えは胃の話がはずむ友が出来

初詣今年は家族一人増え

新春三日忘れられないパン焼

カチン板見れば大きな声で孫

人柄の良さが空気を丸くする

口ヒゲを生やして無心にくる息子

金払い悪い家からまた電話

大年へ贈る記念のぬいぐるみ

新正も十日光陰待ったなし

人様に若く見せたい髪を染め

人並みに俺も師走の風邪をひき

頼冠に耳に蓋する裏話

看護婦とわかる薬品臭をもち

お馴初めは忙しいときほっとかれ

よろしくと去年の付が従いて来る

心ちちに乱れて流れ雲を追う

振袖に若さこぼれる初詣

現実に戻れば目刺こげている

峠一つ越えたら違う風に出逢う

なまけがアイデアをつくり出し

指一つツメで許しを乞う渡世

吉報の封書が重く手に届き

初春をともかく寿く美辞麗句

負け犬に味方はしない私語を吐く

民治郎

世界人

春栄

加仙

ひで

佳生

白光子

さよ子

射月芳

操子

早苗報

登美也

孝華

独仙

千草

亀甲

多賀子

夢酔

幸一

裕

巡歩

孝

宗則

寿美子

鶴丸

花子

メ女

与根一

77

募集

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

「微風」	「罪」	「土」	高田博泉選	柳塔(10句)若本多久志選	水煙抄(10句)黒川紫香選	愛染帖(3句)橘高薫風選	課題吟(各題5句以内)
「甘党」	「瓜」	欄	北勝美子選	柳塔(10句)若本多久志選	水煙抄(10句)黒川紫香選	愛染帖(3句)橘高薫風選	課題吟(各題5句以内)

★川柳塔欄の投句は本社同人に限り。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

五月号発表 (3月15日締切)

六月号発表 (4月15日締切)

本社三月句会

日時 三月八日(月) 午後六時
会場 金属会館
南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話 271・3935番

兼題 おはなし
溜息
節句
芽
交際

野村太茂津
江口度選
香川醉々選
阿萬的選
正本水客選

各題三句以内厳守

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川柳塔社

4月は200号記念大会(別稿参照)

本社5月句会は7日(金)

3月の常任理事会は1日(月)

〒545

発行所 川柳塔社

電話 (06)六九一六九一四番

振替口座大阪・三三三八八番

大阪市阿倍野区三好町二丁目一六
ウエムラ第2ビル202号室

印刷所 藤原童心社

編集者 中島蓬太郎

昭和五十七年二月二十五日印刷
昭和五十七年三月一日発行

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)
一年分 六千三百円(送料共)



川柳塔改題二百号記念 誌上句集応募用紙

地名

キ
リ
ト
リ
線

市県

雅号

☆同人・誌友に限らず、どなたでも応募出来ます。

☆作品は旧作・新作いずれも可。(10句厳守)

☆参加費 ￥ 2,000

☆締切 3月20日到着まで。

☆郵便小為替と同封で会計室まで送付下さい。

〒581 八尾市中田2丁目302 高杉鬼遊方 川柳塔会計室

☆二月三日、日本川柳協会
の常任理事会の帰り、栗副
主幹と太茂津氏との三人で
難人形の売出しに賑わう間
屋町、松屋町へ寄る。川柳
塔の社旗を眺めるため、

ブロード地の海老茶色の立
派なのが出来ることになる
☆儀式と言うものは簡単に
済ませば済ませられるが、伝
儀式は文化と言う通り、伝
統の重さを増いひいては作

肉体疲労時のVB₁₂補給に—— アリナミンA

アリナミンA25の効能—肉体疲労時・病中病後・妊娠授
乳期のビタミンB₁₂補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・
肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで
正しくお使いください。☆くわしくは医師、
薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。

武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



品に力を生む。

☆本社の関係者は、当分四
月四日に焦点を合わせて行
動することになる。参加者
に気持ちの良い大会だったと
喜んで頂けるような心を砕い
ています。

☆大西良慶師が「これは私
の宝ものなの」と、五つ子
の初めての年賀状を手にし
て言われた。そこで女性特
集の寄稿をお願いしたので
ある。

(薫)

▽今年来た姉さんも居る雛
祭／白酒の酔が可愛い雛
の客／雛段をいおって見た
い男の子

いずれも昭和初期の作
品。現在の作品と比べると、
と、すごい作品ということ
はないのだが、おだやかな
落ちついた時代の作品とい
うことはできるだろう。現
代は、テレビで宣伝これつ
とめていよう派手なお
雛様になっているが、当時
の庶民のお雛様の大部分は
そうではなかった。いまは
郷土玩具として残っている
ものがある。たとえば、飛
驒の高山には、土で作った

お雛様のセツトがあった。

この老作家はもうご健在で
はないだろう。二十年ほど
前のことだが、この土人形
のお雛様を、作者に依頼し
て入手することができた。

昨年三月には、久しぶり机
の上に並べて雛祭をしてみ
た。米子地方には、いまだ
も和紙の流し雛があるし、
紀州には、加太神社の雛の
お守りを手にすることがで
きる。吟行の時など心掛け
ておけば、地方に残された
鄙びたお雛様に会えるだろ
う。

(酔)

◇最近気になり肚の立つこ
とに「カレー給食の日」が
ある。学校給食のあり方に
ついて詳しいことは知らない
が、私には戦時中の「日
の丸弁当」が想起され「一
億一心」の標語や「隣組」
の流行歌が聞こえてくる。
昭和十五年、近衛文麿の新
体制運動推進の決意表明が
あり、大政翼賛運動が展開
された。四十余年後のいま
情勢は大きく変わった。にも
かわらず、何故か無関心
でいられない。「学校給食



たのしさひろがるお買物



阪急

大阪府大阪市
東区東船場
1-1-1 阪急百貨店
TEL 06-6533-1111
FAX 06-6533-1112

の全国一斉統一献立」の活
字からカレーの匂いでない
し、じやあ三〇%ならどう
なんだと云いたくなる。
★昔は身の回りの自然現象
で不思議と天気予知がビタ
リと当たったものだ。天気
に関する諺にも面白いのがあ
る。例えば「朝雨女の腕ま
くり」朝の雨はすぐ止む
女の腕まくり同様、気にす
ることはないの意。生活の
知恵は大事にしたい。

(史)

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

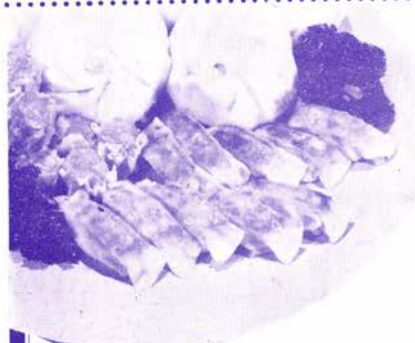
早川繊維工業株式会社

大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶたまん やきぎょうざ
豚饅・焼餃子
しゅうまい ちゃんぽん
焼売・叉焼饅

大 阪 ・ な ン ば



TEL (641) 0551

《支店・出張店》

なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドージマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店 近鉄百貨店(アペノ店・上本町店・奈良店・東大阪店)